

いた素早い事。

「斬れ、叩き斬れ」

あまりの猛勢に是非なく白刃を抜いて、一刀の下に斬り捨てんと振りかざせば、其の刃を飛びくゞつて、刎ねつき、唸りつける凄まじさ。

戦にも攻める獣と守る獣とがあります。山野に於ける猛獣は總て攻める獣であつて、若し獅子を攻める獣の王とすれば、守る獣の王は正しく犬であります。眞に守ることを知る犬が、その天職に殉ずる時は獅子と相當ることすら出来るさうであります、ムク犬は其のよく守る事を知る犬でありました。

それが爲に、お玉は捕へられずに逃げ出すことが出来ましたが、逃げ出したことが、お玉にとつて幸か不幸か、それはまだ判りません

八

でした。假りにも役目に向つた人達に、斯かる猛烈な正當防衛を試むる事の理非は悲しい哉、ムク犬には判断がつかせませんでした。

隠れが岡(尾上山)に近い荒ら家の中で、

十七姫御が旅に立つ

それを殿御が聞附けて

留まれ、と袖を曳く

それで留まらぬものならば

馬を追ひ出せ彌太郎殿

明日は吉日日も好いで

産士参りをしませうか

これは至極暢氣な鼻歌でありました。家の外には秋草の中に鶏頭が立つてゐる。穀物だの芋だのが干してあつて蓆の上で二三羽の鶏が餌を漁つて歩いてゐると何に驚いてか、キャノノノノノノノノノ、けたましく其の鶏が鳴き出して、小家の展根の上へ飛んで羽バタキをする、平和な田舎家の庭に不意に旋風が捲いて起りました。

「また來やがつたな」

どんぼ口から飛び出したのは、一人の子供……、身の丈は四尺位、諸肌脱ぎで、手に一本の竿を持つて、ひよいと飛び出した處を見れば、誰も子供が出たと思ひます。

併しよくく見れば、子供では無いのでありました。面は猿のやうで口が大きい、額には仔細らしく三筋ばかりの皺が疊んである。こ

いつて年寄ではない。隆々とした筋肉、鐵片を叩きつけたやうに締つて、神將の名作を型にとつて小さくした骨格、全體の鈞合から云へばよく整ふてゐて不具ではないが柄を見れば子供、面を見れば老人、肉を見れば輝々たる壯俊。

殊に可笑いのは其の頭で、茶釜を頭の真中で五寸ばかり押立てゝ居る格好たら無い。

「こん畜生」

いきなり手に持つてゐた長い竿を秋草の植込の中へ突込んで引き出すと、その先へ田樂刺に刺された黒いもの。

「状態あ見ろ」

揚々として、その竿を手元に繰込んで來ると、その竿の先に田樂刺になつた黒いものは一疋の黼でありました。

焼鳥を串から引込ぬくやうに、鰯を竿の先から抜き取つて、それを地面へ叩きつけると、屋根の上へ飛び上がった鶏がホッと安心したやうに下りて来て、今自分達を襲うた強敵が脆くも無惨の最後を遂げたことを吊ふかのやうに鰯の屍骸を遠くから廻つてク、と鳴いてゐるのであります。

「構あねえから突ついて食つてしまへ〜」  
竿の先を巾で拭いてゐる處を見ると二寸ばかりの鋭利なる穂先が羨のやうに立てられてあるのであります。

それを殿御が聞きつけて  
留まれ〜と袖を曳く

これがこの先生の得意の鼻歌であると覺しく前にもこれを歌つてゐたが、

それで留まらぬものならば

馬を追ひ出せ彌太郎殿……

この時裏手の方で、

「米友さん、米友さん、家に居るの、よう米友さん」

息を切つた女の子の聲。

「誰だい、玉ちゃんかい」

「米友さん」

この子供のやうな年寄のやうな壯者のやうな奇妙な男の名は米友といふのであります。そこへ駆け込んで来たのは、今何も彼も夢中で我が家を逃げ出して来たお玉でありました。

「どうしたんだい、玉ちゃん、跣足で、息を切つて、唇の色まで變つてらあ」

「米友さん、大變なんだよ、大變が出来たんだから、わたしを隠して下さい」

「大變といふのは一體どうしたんだい」

「わたしは何も悪いことをした覚えはないのに、お役人が来てわたしを捕まへて行かうとするもんだから、わたしは一生懸命逃げて来たの」

「玉ちゃんを役人が捉まへるつて、可笑しいなあ、何かの間違ひなんだらう」

「間違ひに違ひないんだよ」

「何の間違ひだらう」

「何だか、それが譯る位なら間違やしない、斯うしてゐる間にも追蒐けて来るかも知れないから、早く隠して下さいよう」

「此處へ来れば大丈夫だよ、お前あの戸棚へ入つてゐれば、俺がこゝで仕事をしてゐる、役人が来ても知らないと言ふよ」

「早く、其では戸棚へ入れてお呉れ」

「まだ宜いよ、足音が聞えてからで宜いよ」

「だつてお前」

「若し役人が愚圖々々云へば、この竿で嚇かしてやらあ」

「だつてお前、お役人に手向ひしちやあ悪いよ」

「ナニ嚇かすだけだから宜いよ、そりやさうと玉ちゃん、ムクは如何したんだえ、ムクが付いてゐる筈じゃないか、お前が役人に捉まらうとする時にムクが黙つてゐたかえ」

「ムク！」

ムク、あゝさうだ。

「米友さん、ムクを助けて来て下さい、早くムクを助けて下さい、ムクは殺されてしまひます、早く」

「ムクはお前の捉まりさうな時に、やつぱり家に居たのかい」

「ムクがお役人に噛みついてゐる間に、わたしは此處まで逃て来たのよ、ムクのお蔭でわたしは助かつたのだから、お前さん早くムクを助けてやつて下さい」

「よし、それじゃあ、ムクを助けに行つてやらう、玉ちゃん、お前は此の戸棚の中に隠れておゐで」

「米友さん、怪我をしないやうにして下さいよ、お役人に手向ひなんぞをしないやうにね、さうしてムクだけを助けて来て下さい」

「大丈夫だよ、安心して隠れておゐで、怪我をしねへやうに働いてお役人にも怪我をさせねへやうにしてムクも怪我をさせねへで伴れ

て来るから」

「どうぞ頼みますよ」

米友は、鮠を突いた竿を手を取つてその穂先の鋭い處へ、柱にかけてあつた五色の網の袋を差し込んで、それを小腋にすると、とつとと表へ飛び出しました。

## 九

お杉お玉等は間の山へ出て客を呼ぶ。米友は宇治橋の下に立つて客を呼んで錢を乞ふ。お杉お玉は三味線の撥で客の投げた錢を受ける。米友は今持つてゐた竿、竿の先の五色の網の袋で、客の投げた錢を受け止めるのが商賣で其れを「網受」と申します。

織田平ノ信長没落後、家臣鳥屋尾左京ト申ス者當所ニ來住ス。傍輩ノ浪人ハ其ノ縁ヲ以テ諸大名ニ奉公ニ出デ又、左京儀ハ他家ノ主人ニ仕フル事、本意ナラズ存ゼラレ候。然レ共浪人ノ身渡世ノ送り様之レ無キヤ、毎日大橋ノ下ヘ出デ竹末ニ編笠ヲ付ケ槍ノ上手故、其ノ目的ヲ以テ諸參宮人ニ錢ヲ乞ヒ百錢ニ一錢モ受ケ落スト云フコトナシ。

この鳥屋尾左京を網受の元祖として米友はその流れを汲んで、やはり宇治橋の下で網受をしてゐるけれど、身分は左京の後裔でも何でも無い、同じく拜田村系統のほいどの出であります。

米友の天性は小兵で敏捷。この網受けに割振られるものは、先づ槍の遣ひ方を習はせられるのを常例とする。米友はその常例によつて旅に來た浪人から「淡路流」の槍の一手を教へられたが三日教へら

れると直ぐにその秘傳を會得してしまひました。

淡路流の槍は穂先が短い、掌で掴むと隠れてしまふ。穂先を左の掌で掴んで、右手で槍の七三のあたりを持つと、それで構えが来る、その構えた處を相手が見ると、槍を構えて居るとは見えない。棒か竿か？と敵が當惑した瞬間に、短い穂先は掌から飛び出して咽喉元へブツリ。實に魔の如き俊敏なる槍であります。

この俊敏なる淡路流の槍を遣ふべく米友の天性格好が詭へ向きに出來て居りました。

米友は槍を學ぶとしては前後に、たつた三日であるが、槍を扱ふ素質としては一日の故ではありませんでした。庭を飛ぶトンボを突く、川を泳ぐ魚を突く、今も鶏を追ふ駒を突いた。その位だから宇治橋の下に立つて、客の投げる錢を百に一つも受け外すといふ事はな

いのでありました。それに加うるに能く木登りをする、高い處から飛ぶ、廣い間を飛び越える。深い水を泳ぐ。天公はいたづら者で、世間並でない處へ世間並以上の者を作る、お杉お玉の容貌もそれで、赤友の俊敏なる天性もそれでありませす。

## 十

こゝにまた話が變つて、古市の町の豆腐六のうどん屋の前の事になる。この豆腐六のうどん屋で、うどんを食べて居たまだ前髪立の旅の若い侍がありました。前髪立の旅の若い侍と廻りクドク言ふよりは、宇津木兵馬といつた方が前からの讀者にはわかりが宜いのであります。

宇津木兵馬は、紀州の龍神村で、兄の仇机龍之助の姿を見失つてから、今日は此處へ來てゐるが、七兵衛やお松の姿は此處には見えませんでした。兵馬は一人で此處へ來て、ひとりで此處から内宮へ参詣をしやうといふ途中にあるのであります。

豆腐六のうどんは雪のやうに白くて玉のやうに太い、それに墨のやうに黒い醬油を十滴ほどかけて食ふ。

『このうどんを生きてゐるうちに食はなければ、死んで閻魔に叱られる』

土地の人には斯う云ひ囃されてゐる名物、兵馬はそれと知らずに此のうどんを食べてゐると、表が騒々しい。

『何事だ〜』

店に居たものは皆んな表を見る。通りかゝつた人が逆に逃げる、牛

馬が驚いて嘶く、犬が吠えて走る、鶏が飛んで屋根へ上るといふ騒ぎであります。

「狂犬が出た！」

ワアーツと叫びます。怖い者見たさの店に居た連中は飛び出して見ると、ワツ／＼と逃げ惑ふ人畜の向ふから、疾風の如く飛び狂つて来る大きな犬があるのであります。

「ムクだ／＼間の山のお玉のムク犬だ」

村方の方から驀然に此の古市の町へ走り込んだムクのあとを追ひかけて来るのが何十人といふ人、獲物を持ち、石や瓦を抱えてゐる、前には役人連、そのあとから番太、破落戸、彌次馬の類が続く、

「それ狂犬だア、逃げる！」

追かけたのとは反對の側から、また數十人、同じく役人、岡引、番

太、破落戸、彌次馬の一連

「そうれ、逃がすな」

ムクは古市の町の左側の大榎の處まで来た時分に前後から挟み打にされてしまひました。

大榎を後にしてムクの眼は螢のやうに光る、血を浴びた首筋の毛が逆さに立つて獅子の鬣を見るやうでありました。前足を組み違へて、尾をキリ／＼と捲き上げて、火を吹くやうな聲で、ウオー／＼と唸つて最早ドチラへも切れることの出来ない圍みの中に立ち迷ふてゐました。

「狂犬を打ち殺せ」

石や瓦や棒片が立ち迷うてゐるムクを目がけて雨のやうに降る。ムク犬は決して狂犬になつたわけではないのでした。主人の危急を



救はんとして狂犬にされてしまつたのでありました、可哀想にムク  
犬も斯うしてゐれば結局狂犬として此處で殺されるより外はない  
のでありました。時に天の一方から

「退いた！退いた！退きあがれ」

鐵砲玉のやうに飛び込んで来た二人の小男。諸肌脱ぎで竹の竿に五  
色の綱、

「やい、ムクは狂犬じゃねえんだ、汝たちが狂犬にしちまつた  
んだ、ムクを殺しやがると承知しねえぞ」

それは米友でありました。四尺の身體に隆々と瘤が出来て、金剛力  
土を小さくした形。

「イヨ一米友！」

妙な役者が飛び出したと、屋根の上で見物してゐた彌次馬が一齊に

囁し出すと米友は網竿を水車のやうに廻して

「ムクは温和しい犬なんだ、今まで人を吠えた事も、噛み付いた事  
も無え犬なんだ、それを汝達が寄つて集つて狂犬にしてしまやがる  
状態あ見やがれ、その温和しいムクが怒ると此んなものなんだ、一  
疋の畜生に何百てえ人間が、吠面あ掻いて逃げ損なつて居やあがる  
この上米友様の御機嫌を損ねたら如何するつもりだ、さあ通せ、道  
を開いて通せ、ムク様と米友様のお通りだから道を開いて素直に通  
せやい」

「イヨ一米友大出来」

「通さなけりや、こつちにも了簡がある、やい早く其處の道を開き  
やがれ」

米友は勇氣凜々として、竿を打ち振つて行手の群衆に道を開けと命

令する。

「彼奴は、あの通り小兵だけれども、肉のブリ／＼と縮まつてゐることを見ろ、あれで力のあることが大したものなんだ、身體のこなしの敏捷いこと、云つたら木鼠のやうなもので、槍を遣はせては口本一だ」

米友の手並は事實と誇張とで評判になつて、恐怖の騒動の巷はこゝで一種の興味ある大人氣を加へてしまひました。その時、誰が投げたかヒューと風を切つて飛んで來た拳大の石。

「何を仕やがる」

竿の網を袋にならぬやうに強く張つた五色の絲。それでムクの鼻面に飛んで來た石をバツと受け返す途端にまた一箇米友の面を望んで飛んで來た石を透かさずバツと受け留めて

「石の投錢といふのは、鳥屋尾左京以來無え圖だ。投るなら投げて見ろ、一つ二つとしてみつたれな投げ方をするな、古市の町の石でも瓦でも有りつたけ投て見やあがれ、それでも足りなけあ、五十鈴川の河原の石と、宮川の流れの石とお借申して來て投て見やがれ、それで足りねえ時は賽の河原へ行つてお地藏様の前からお借り申して來い、投げるのは手前達の勝手だ、受るのは此方のお手の物だ、四尺に足りねえ米友の身體に汝達の投げた石ころ一つでも當つたらお眼にかゝらあ、さあ投げろ／＼」

米友は竿の先を手許に繰つて、五色の網をキリ／＼と手丈夫に締め直すと、ヒューとまた鼻面に飛んで來たのを、鏡でも見るやうにしてハツタと受けて

「まだ早いやい、さあ來い！」

竿を立て直すと、それが合圖となつて前後左右から注文通り、ヒユ  
ーヒユーと飛んで来る石と瓦が雨霰あめあられ。

「ムク、お前は俺の後に隠れてゐる、その榎から脊中を見せねえや  
うにしろ、後からそつと忍んで来る奴があつたら、おれが承知だか  
ら遠慮なく食ひついてやれ、噛み殺しても構はねえぞ」

大榎とムク犬を後にして立つた米友。身近に来る石といふ石、瓦と  
いふ瓦を、或は竿を繰延べて前で受け、或は竿を手許に繰込んで面  
の前で受け、或は身を沈めて空を飛ばせ、體を躍らせて飛び上がる  
「やい／＼、もちつと骨身のある投方をしやあがれ、打着いたら音  
のするやうに、當つたら碎けるやうに投げて見ねえ、米友様が食ひ  
足りねえと仰有る、ナニ鐵砲だつて」

米友は屋根の上を屹と見る、生薬屋の屋根の上へ、火繩銃を擔ぎ上  
げたのは、米友も知つてゐる田丸の町の藤吉といふ獵師であつたか  
ら、

「巫山戯ちやあ可いねえせ、米友様だつてこれ生身を持つた身體だ  
飛道具でやられて堪るか、ムク斯うしちあゐられねえぞ、俺等に  
續け、合點か」

身を沈めて飛び来る石瓦を替はしながら、後を振り返つてムクに合  
圖をすると竿の頭から五色の網を拂ひのける、明晃々たる淡路流の  
短い穂先。それを扱いて一文字に、群衆の中へ飛び込んでしまつた  
その早いこと、生薬屋の屋根の上から尻ひを定めやうとした獵師の  
藤吉は火繩を吹いて呆氣に取られ、

「迅い奴だ、鐵砲玉より迅い」  
人混の中へ鐵砲は打ち込めないから手持無沙汰。

米友が飛ぶと、ムクも飛ぶ、一團になつて遠捲きにして居た群衆の頭の上から人と犬とが一度に落ちて來たのだから、ワアーツと云つて崩れ立つ。

「ざまあ見やがれ」

彌次馬は崩れたが、逃げられないのは警護に出向いて居た奉行の捕手、

「神妙に致せ、手向ひ致すと罪が重いぞ」

「好きで手向へをするんじやねえ、汝達が手向へをするやうに仕かけるから手向へをするんだ、素直に俺等とムクを通して呉れ、道を開けて通して呉れりや文句は無えんだ、やい通しやがれ」

鐵砲の覗ひを亂す爲に米友は、わざと人の中を割つて働く、槍をグツと手元につめて七寸の位にして遣つて見る、隻手突に投げ出して

八重に遣ふ。感心なことに、皮一重まで持つて行つて肉へは刺らせない、それで寄手の連中が引繰返る。後へ廻つてはムクが居る。八面應酬して人と犬と一體、鐵砲を避けん爲に潜り、血路を開かんが爲に飛ぶ。

どちらでも風向のよい方に傾く屋根の上で見物の彌次馬は、米友とムクが生命がけの曲藝を見て、やんやと讚め出してしまひました。最前は面白半分、米とムクとに向つて石や瓦を投げつけてゐた連中が、いつしか米とムクとの最負になつて聲援をする。

田丸の町の獵師の藤吉は、幾度か鐵砲を取り直してムクだけでも仕留めてやらうと覗ひをつけては、つけ損ふ。騒ぎは益々大きくなつて、古市の町は引繰返りさうで、さしもの參宮道が一時は全く途断へてしまふ。豆腐六のうどんを食ひさした宇津木兵馬は、多寡が一

疋の狂犬に、さりとは仰々しい騒ぎやう哉と、いざ笠を被つて店を出やうとする其の出鼻で此の騒ぎであるから、足を留めないわけには行きませんでした。人の肩越からその氣もなく覗いて見るとさても此の有様。

「はて」

生命がけでやる米友の曲藝。只見る丈四尺あるや無しの小兵の男、竿に仕かけた槍を遣ふこと神の如く、魔の如く、電の如く、隼の如し。

「あゝ、見事な働さじや」

兵馬は眼を拭つて、我とも知らず人を押し別けて前へ出る。

「御所望致す、そのお手槍をお貸し下されますまいか」

暫らく見てゐた宇津木兵馬は山田奉行の役人の下僕も見える男の

傍へ寄つて、その持つてゐる槍をお貸し下されたしと申入れます。

「槍を何に致される」

役人は兵馬に向つて尋ねますと

「あの小兵の男、何者とも知らねど槍の扱ひぶり至極珍らしい、一手應待を致して見たいと存じます」

「ナニ、貴公があの中へ出向いて見たいと云はるゝか」

「左様にござる、で、卒爾ながら其のお槍の拜借をお願ひ致す儀でござる」

若いに似合はず大膽な言ひ振でしたから面々は感心もし、危なくも思ひ、

「それは近頃お勇ましいお申出でござるが御覽の通り、あれは人間業でない奴、うつかり近づくよりは遠巻に致して疲れを待つ方が得

策でござる捨て置かつしやい」

「いや、あの勢では中々以て疲れは致しませぬ、たとへ一時たりとも参宮の街道を、あの狼籍に任せ置くは心外、よつて拙者が應待をして見たいとの所望、それを御承知願ひたい」

役人は兵馬が小賢しい物の言ひやうをするとでも思つたのか。

「折角ながら狼籍を取り鎮めるは拙者共の役目、貴公等のお骨折には及び申さぬ」

「然らば是非もない」

兵馬は是非なく立つて、尙ほ米友とムクとの働き振りを見やうとしたが、人立で背伸をしても中を覗くことが出来ませんでした。たゞ中でワァーツといふ聲が崩れるやうに湧くばかり。

「そうれ来た！逃げろ」

兵馬の前に居た黒山の人間が浮足立つて崩れると、その中で米友の大音。

「やい、やい、いつまでも斯うしちや居られねえ、道を開けなけりやあ、血を見せるぞ、血の河を流して人の堤を突切るからさう思へ俺等は悪人で無えから血を見るのも嫌えだし、見せるのも忌なんだが、汝達が、あんまり執濃から一番真槍の突つき振りを見せてやる事になるんだ、さあ来やがれ、今までは米友様の御遠慮で成るべく怪我の無えやうに扱つてやつたんだ、斯うなりや肉も血も骨も突削るからさう思へ、千人に一人も逃しつこは無えぞ、淡路流の槍に米友流の精分が入つてる此の槍先の田楽串が一本食つて見てへ奴はお儼なしに前へ出る、それが嫌なら道を開けて通しやがれ」

この猛烈なる悪態で浮足立つた人が總崩れになつて奔流の如く逃げ

走る。兵馬に槍を貸すことを謝絶つた役人連中までが逃げかゝる。「兎も角も、そのお槍をお貸し下さい」逃げやうとした槍持の手から兵馬は手槍を奪ひ取る、奪ひ取つたのではない、抛り出して逃げやうとしたのを兵馬が拾ひ上げたまでなのでありました。兵馬が其の槍を拾ひ取ると、

「あ、殺られた」

米友は遂に捕手か彌次馬かを突き伏せてしまつたと見える。血を見ると寄手も狂ふ、米友は尙ほ狂ふ。一人突くも十人突くも罪は同じ、それで米友は死者狂ひになつたらしいのであります。曲藝氣取りでやつてゐてさへ、米友の網竿は恐ろしい、死者狂ひになつて眞劍に荒れ出されては堪らない、深傷、淺傷の槍創を負つて逃げ退くもの數知れず、米友は無人の境を行くやうに槍を突かけて

飛び廻る。ムクも亦それに續く。

其處へスーと手槍を突き出したのが宇津木兵馬でありました。

「待て」

「馬鹿野郎、俺等の前へ槍を出す奴があるか」

兵馬の突き出した槍は米友を驚かしました。米友が何故に驚いたかと云へば、自分の前へ槍を突き出すのは餅屋の前へ来て餅を賣り川の岸へ来て水を賣るのと同じことだから、それで驚いたものと思ひました。何も兵馬の槍先が最初から怖ろしいのでそれで驚いたのではありませんでした。槍を取れば、宇治山田の米友の眼中に人は無くなるのだから、驚いた後は小癩に觸つてたゞ一突に突き倒す氣合で来たのを、中段につけて居た兵馬はスーとそれを引いて撞木返りに米友の咽喉元へ槍が行く。

「や、や、や」

米友はタチ／＼と後へ下がった。

「やるな、こん畜生」

後へ下がつて米友は待の形に槍を構へ直した。兵馬は敵の退いたよ  
け、それだけ足を進めて槍もそれと合致して進む。

「それ！」

米友の懸つて覗ふ所は兵馬の眼と鼻の間。その隼のやうな眼の働  
き。兵馬はそれに驚かず、デリ、／＼と槍をつけてゐる。

兵馬の槍は格に入つた槍、大和國三輪大明神の社家、植田丹後守か  
ら鎌寶藏院の極意を傳へられてゐることは知る人もあらう、島田虎  
之助の門下で、大石進の故意を學んで、刀を以て下げ針を突くの精  
妙を極めてゐることも知る人は知るであらうが、こゝの見物は其ん

な事は知らず、米友も無論そんなことは知らず。

縁もゆかりも無い處で、事を好んで危きに近寄るのは、人の難儀を  
見て見のがせなかつた爲か、たゞしは多くの人の見る前で腕を現は  
して見たいのか、いくら兵馬が年が若いからとて、それほど物奇に  
仕立てられては居ない筈。兵馬が米友に向つたのは、米友の槍の使  
ひが餘りに奇妙不思議であつたからでありました。先づ手に持つて  
ゐるのが槍だか竿だかわからないのに、その使ひぶりと來た口には  
格も法も一切蹂躪し去つて野性横溢、奇妙幻出、何とも名狀するこ  
とが出来ないのが餘りに不思議でありました。

兵馬は劔に於ても、槍に於ても其の頃の大宗師の正々堂々たる格法  
を見習つてゐる人でありました。それが今こゝへ來て米友の仕業を  
見れば、正しくこれは別の世界に驕つてゐる人と思はないわけには



行きませんでした。驕るにはあらず寧ろ天真流露、自ら知らずして自ら得てゐる人に近い。兵馬が感心をしたのは其れで、思ひがけない處で思ひがけない寶を掘出したと同じ思ひがするのでありました。それを取ることば明眼の人の義務であつて、人の爲でもない自分の爲でもないといふ心からでした。

兵馬の知らうとして、まだ知ることの出来ないのは机龍之助が音無しの構。それにも拘らず此處では思はざる拾ひ物をした。

兵馬は槍を上段につけて、米友の咽喉を扼してゐる。

米友は猿のやうな眼をかゞやかして槍を七三の形にして米友一流の備へ、ムクは凝と兩足を揃えたまゝ兵馬を睨んで唸つてゐます。

げ足の立つた見物は、こゝでまた引返して四方から取り圍ひ思ひがけぬ槍試合、槍を上段につけたまゝ兵馬が一步進

が一步退く。

一步々々と兵馬は追ひ詰めて行く、米友は一步々々と下がつて行くムクもそれにつれてチリ／＼と米友並に下がる。

兵馬に米友を突くつもりのない事はわかつてゐる。兵馬はただ斯うして一步々々と米友を追ひつめてさへ居れば遂に彼は窮して槍を投げ出すものと思つてゐるらしい。それだから兵馬はいつも上段の位を換えずに極めて少しづつ追ひ込んで行く。

米友は猿のやうな眼をクル／＼と廻して齒を噛みならして色は眞赤になる。突き出す事も出来ず拂ひのける事も出来ず、焦れてウオー／＼と叫ぶ。米友の陣立が悪い時、それを補ふのがムクの役目であればならぬ。それが米友並に一足づつ引いて行つたのではムクらしくもない。氣を見ることを知つてゐるムクは兵馬の槍先が、たと

へ米友の咽喉へ向いてゐたからにした處で、そこで固まつてしまふ槍でないことを知つてゐる。變化の働さを怖るればこそ、同じやうに引いて行くのではあるまいか、或ひはまた兵馬に米友を突くの心なしと見て取つて、ワザと後れてゐるのではあるまいか。併し乍ら米友は脂汗を流して、いよいよ追ひ詰められる。この間が仲々長い、見物は静まり返つて手に汗を握る。

兵馬は追ひ詰め、米友は突き詰められて到頭、前の大榎の處まで来てしまひました。大榎を脊中にして米友はこれより後へは一步も退くことは出来ぬ。兵馬が前の調子で進んで行けば米友は勢ひ此の大榎の幹へ串刺に縫ひつけられる。

米友の五體は茹で上げたやうに眞赤になる、筋肉がピリ／＼と動き出した。ムクも亦その傍まで来て、兵馬を睨んで唸つてゐる。絶對

絶命と見えた時、

「エヤア」

何とも名狀すべからざる奇聲を立てて、米友の竿は兵馬の面上に向つて飛び出した。と思ふと、竿は米友の手から離れて矢車のやうに宙天に飛び上がる。

「エ、終つた！」

米友の突き出す竿を兵馬は下からすくうて撥ね返してしまつたらしい。米友の竿を撥ね返した兵馬は、その槍で直様附け入つて咽喉元をグサと貫く手順であつたが、それがさう行かないで茫を手先に引いてしまひました。

大榎に串刺に縫ひつけらるべき筈の米友が其處にはゐない。この時大榎の上の枝の間から聲がする。

「やい、手前はエライ奴だ、宇治山田の米友の竿を撥ね落す奴は日本に二人とはあるめへ、その腕に惚れたから、米友が今日は綺麗に負けて逃げてやらあ、だがな、おい、役人、町の奴等、ムクを殺すと承知しねえぞ、ムクを殺すやうな事があれば、この米友が宇治と山田の町へ火をつけて焼き拂ふから左様思へ、宇治と山田の町へ火を放けたら、手前達は好くつても大神宮様に申譯があるめえ、火を放られるのが忌だと思つたらムクを放してやれ、いゝか、それ屋根から屋根へ飛んで米友様がお逃げ遊ばすのだ、彌次馬退きやがれ」

屋根にゐた彌次馬連は此の聲を聞いて屋根から轉び落つるほどに驚いて逃げ走りました。

米友は榎から屋根、屋根から屋根、瞬く間に姿を隠してしまつた身

の軽いな。

## 十一

「可けねえ〜」

米友は茹でたやうになつて、隠れが岡のわが荒ら家へ歸つて來ると戸棚に隠れてゐたお玉が出て、

「ムクは殺されてしまつて」

「うゝん、殺されやあしねえけれど助からなかつた、古市の町へ逃げ込んで、大勢に圍まれてゐるんだ、ムクの事も心配だが、お前と俺、斯うしちやあ居られねえ」

「何處へ逃げませうね」

「何處と云つて俺にも當は無え、山の方へ逃げて見やう」

「友さん、竿を如何したの」

「馬鹿々々しいやい、宇治山田の米友が商賣物の竿を召し上げられちやつた」

「誰かにあれを取られたの」

「そんな事は如何でも宜い、早く逃げなくちや可けねえ、玉ちやん俺の脊中へ乗つかりねえ」

「わたしだつて歩けますよ」

「歩けるたつて世話が焼けて可けねえ、引被いで行くから遠慮をしなさんな」

「でも、こんな大きな姿をして背負さつては定まりが悪いから歩けるだけ歩きますよ」

「定まりが悪いどころの話じゃ無えお前と俺は此處を逃げると二度と二たび、此土地へ足を踏ん込めねえんだ、山へ逃げ込めば山ん中で當分隠れて里へは出られねえんだ、だから此處に有合せもの、粟でも薯でもお米でも皆んな此の袋へ入れて俺等が擔いで行くよ」

「さうませう、それにしてもわたしはムクの事が心配になる」

「心配しなさんな、俺等が町の奴等を嚇かしといたから奴等もムクを殺しはしめえ、生きてありやあ、ムクの事だから山ん中に居やうと谷底に隠れてゐやうと、あとを尋ねて来るからな」

「ほんとに左様だと善いけれど」

「左様に違えねえ」

これ等の連中の頭は實に單純を極めて居りました。お玉は何の故にして自分が召捕に來られたのだからわからない。米友も亦固よりそれ

がわからない。お互にわからない同志で逃げ出したり助けに行つたり、泣き事を云つたり啖呵を切つたりしてゐる。彼等にとつては人間の出来事も偶然の天災も同じことで、地震、雷、火事の場合と同じやうに當面の事だけ逃たり避けたり反抗したりしてゐれば宜いつもりでゐるのでした。

お玉には笠を被せて、身なりも成るべくお玉でいいやうにし、米友も亦笠を被つて人目を隠し、袋へは有り合せた食料や日用品を詰め込んで肩にかけて飛び出しました。

「玉ちゃん、俺等は考えたがな、山へ逃げ込むよりもだな、これからすつと南へ行つて野見坂峠といふのを越すと鶴倉といふ濱邊へ出るからな、その濱邊から船へ乗つて逃げやうじゃねえか、船へ乗つ

ちまへばお前、熊野へ行かうと宮へ行かうと勝手なもんだ、役人だつて其れまで追ひかけちや来られねえんだ」

米友が斯う言ひ出したのは、宮川をズン／＼遡ぼつて、川口といふ處から中の郷へ来かゝつた時分でありました。

「それもさうだね、友さんの宜いやうにして下さい、けれどもね友さん、舟へ乗つちまつてはムクが尋ねて来られないじやないか」

「それもさうだな……よし／＼それじや何方にしろ一旦濱邊へ着いてから、お前を隠して置いて、俺等はまた引返して、もう一ムクを尋ねに行つて来らあ」

「それは危ないよ」

「ナニ隠れて行きやあ大丈夫だ」

「それだつてお前危ないさ、仕方がないからムクの事はムクとして

置いて、その濱邊とやらへ早く逃げませうよ』

「それが宜からう、俺等はムクの事は大丈夫だと思つてるんだ、あの犬は人に殺される氣遣えは無えと斯う思つてるんだ』

「わたしも何だか、さう思へて仕方がないの、いつもムクが居なけりやあモット淋しいんだが、今度はそんなに淋しいとは思はないから、きつとムクは無事なんだよ、それでわたしは安心してゐる』

「まあ、何にしても此處まで無事に來りやあもう占めたもの、何處か今夜は一つ山神の祠でもお借り申して一晩泊めて貰つて、それから明日の朝、野見坂峠を越して鶴倉へ出るんだ、玉ちやん草臥れたらう、もう一息だ我慢しな』

「なあにそんなに草臥れやしませんよ』

たしかに六七里は來てゐるから、お玉の足では可成り草臥れてゐました。所帶道具を背負つてゐる爲に、米友は今更お玉を背負つてやるわけにも行きませんでした。

「やあ橋がこわれてやがる、何だ出逢橋だつて、洒落た名前だな、出逢橋がこわれて縁切橋なんぞは氣が利かねえ、飛んじまへ、玉ちやんお前飛べるかへ、飛べなけあ、何處から丸太を探し出して橋をかけてやるがどうだい』

米友は輕々と其のこわれた板橋の間を飛び越えてしまつて、荷物を其處へ下ろしてゐるとお玉は

「飛べますよ、この位の處、わたしだつて』

距離は一問位しか無いのだから、お玉も何の氣なし

「どつこいしよ』

米友が氣づかつてゐるのを無頓着に飛びは飛んだが見事に飛び損ね

てしまひました。

「あれ——」

ソレ、だから云はねえこつちやあ無え」

米友は喫驚して小川へ陥つたお玉の手を取る、川は小さな流れだけれども、相當の深さでありました。

さういふ場合に於ける米友は注文より以上に敏捷つこいので、女を水物にしてしまふやうなことはなく、お玉がおつこちるが早いか直ぐに腕を取つて引き上げてしまひました。

「だから云はねえ事ちやあ無え、待つてありやあ丸太を持つて來て橋を架けてやるものを、氣の短けえ事つたら」

米友は小言を云ひながらお玉を引き上げてゐると、

「平常なら此の位の處は何でも無いけれど今日は氣が焦いてゐるも

んだから」

「まあ、仕方が無え、これビシヨ濡れた、上着も帯も、それに向ふ腰を少し摺り剝いたね、痛いかえ」

「痛かありません」

「これじやあ道中が出來ねえ、さうかど云つて人の家へは寄れねえ旅なんだから、山ん中へ入らう、まだ泊るには早いけれど、何處かで其の着物を乾かす處を探さなくつちやあな」

「さうだねえ」

「エ、ど、あの高えのが獅子ヶ鼻といふ山だ、あの山の蔭へ行つて見たら、宜い所があるかも知れねえ」

「行きませう、人が來ると可けないから早く」

二人は尙ほ南へ行かうとした道を曲げて、西の方へ道のない山ふと

ころを分けて獅子が鼻の山の下へ出ました。

四方を見れば寂然として深谷の中にある思ひ、風もないから木も動かぬ、日の光りが照すのでなく覗くやうにとろりとしてゐる。

「玉ちやん、さあ着物を脱ぎねえ」

大きな樅の木の下、岩角が自然と洞になつてゐる處、米友は其處を見出して自分が先に荷物を卸ろして

「此處なら誂へ向き、その木と木の間に今梁をこしらへるから、そこへ着物をかけて乾かして置けば、着物の乾く間、それが屋根にならあ」

立枯の木をへし折つて、それを蔓で結えて干場を拵へる。

「さあ、干場が出来たから着物を脱ぎねえ」

お玉は帯を解きかけながら、

「米友さん」

「何だい」

「襦袢まで湿つてるんだよ」

「なら襦袢まで脱いだら宜からう」

「襦袢まで脱げば裸になつてしまふじやないか」

「裸、だつて仕方が無え」

「裸になるのは忌だねえ」

「忌だつて、その濡れた着物を着ちやあ居られめえ」

「それだつてお前」

「何だい」

「恥かしいねえ」

お玉は、はにかんで面を赤くする、米友は猿のやうな眼を圓くして



「恥かしい」

さう云つて四方を見廻したが森閑たる谷の中。

「恥かしいつたつて、誰もゐやしねえじやねえか」

「誰も居ないつたつて、恥かしいわ、それにお前も見てゐるじやないか」

「俺等が見て居たつて……」

米友は四方を見廻した面をお玉の面へ持つて行くど、

「うん成程、お前が裸になるのが忌なら、俺等が先に裸にならあ」

「米さん、お前が裸になつてどうするの」

「俺等の着物をお前に着せてやらう」

「それではお前が裸になるじやないか」

「そりやさうさ、何方か一人裸にならなけりや納まりがつくめえ」

「それでもお前を裸にしちやあ氣の毒だわ」

「お前は裸になるのが恥かしいといふじや無えか、俺等は裸なんぞ

は些ども恥かしいと思はねえ、裸の方が宜い心持な位なもんだ」

「それじやあ濟まないけれど、さうしてお呉れ」

「さうしてやらう」

米友は無難作に帯を解いて自分の着てゐた着物を脱いでクル／＼と纏めてお玉に渡します。

成程、米友は自分で裸の方が好きだといふ通り、見た目にも裸の方が宜しいのでありました。着物を着てゐたんでは小兵の米友の肉の締まり加減はわからないが、着物を脱ぐと始めて其の筋肉の美觀が現はれる。名工の刻んだ四天王の木彫を見るやうな骨格肉附。

「ほんとうに友さんの身體は小柄だけれども宜く締まつてゐるこ

と」  
お玉はお受相を言つて、米友の脱いで貸して呉れた着物を受取りま  
す。

「火を焚きつけてやらう、火を一つ」

持つて来た所帯袋から米友は火打を取り出して、松葉や枯枝を掻き  
集めて焚火をはじめると、お玉は後を向いて帯を解いて上着から脱  
ぎかける。

「早く引き上げて貰つたから、水の透らない處もあるけれど、帯の  
間なんぞは、こんなにグチャク」  
帯にも下締にも水が入つてゐる。

「風邪でも引くといけねえ」

米友は猿のやうな口を尖らして火を吹く、お玉は上着を脱いでしま

ふと下着、その上着だけを米友が手早く取つて干場へかける。

下着と襦袢とを一緒に脱いで後向きにお玉の半月のやうな肩が顯れ  
る、火を吹いてゐた米友が、

「それ何か落こつた」

「調戲ちや可けないよ」

「何か落ちたよ」

「そんな事を云ふもんじゃないやありませんよ」

お玉は赤くなつて、素早く米友の着物を着換へてしまふ。

お玉は米友が、わざと調戲つてゐるのだと思つてゐます。

「大事なものじゃ無えのかい」

「お止しなさいよ」

「それ其處に」

「思だね」

1111

「そこに白いものが落ちてるじゃ無えか」

白いものと云はれて、お玉はハツと気がつきました。米友は調戲てゐるのでもなければ忌味を云つてゐるのでもない、またさういふこと言へる人間でもないのであつて、事實、お玉が着物を着換えやうとして其處へ取落したものがあつたのです。

「アツ、これは」

事に粉れて今までのすつかり忘れてゐたが、これは、昨晚備前屋の裏口で幽霊のやうな女から頼まれた手紙——金の方は包みかけて置きばなしで逃げて來たが、手紙だけは懐へ入れて居たのを、此の時まで些とも気がつかかなかつた、落して見ればその手紙、同じやうにグツシヨリと濡れ切つてゐました。

「これは大切なもの、今までのすつかり忘れてゐた」

お玉は、あはて、それを拾ひ取つて

「申譯がない、こんなに濡らしちまつて」

この時、米友の焚きつけた火は、よく燃え上がる。

「手紙かい、濡れたんなら、こゝで乾かすがい、火であぶつて置らう」

大事さうにお玉は濡れた手紙を取つて米友に渡しながら

「昨夜備前屋で頼まれた手紙、懐へ入れたまんまで今まで忘れてゐました、あゝお金の方は如何なつたかしら」

「頼まれ物は大事にしなくちやあ可けねえ、おや／＼グシヨ／＼だ封じ目も何も離れちやつた、此の儘では手がつけられねえ、おつと待つたり、宜い事がある、この笠の上へ嬢げて、遠火であぶるとや

1113

「らかせ」

被つて来た笠の上へ、濡れた手紙を置いて、封じ目も何も離れてしまつたから、爪の先で擴げて火の傍へ持つて來ます。その間にお玉は米友の衣裳に着替へてしまつて火の傍へ來ると、米友は干場にかけた着物を表は天日で、裏は焚火で兩面から乾かすやうにして置いて、二人が焚火を圍んで座を占めます。

「紙の方が乾きが早いや、もうこれカサ／＼になつた、元のやうに捲いて封じ目を捲へといてやれ」

笠の上の濡れ手紙が乾いたから、米友はそれを捲き直さうとすると「友さん、お前は字が讀めたねえ」

「讀めなくつてよ、いろはにはへとから源平藤橘、それから三字經に千字文、四書五經の素讀まで俺は習つてゐるんだ」

米友は少しく得意の體

「それは宜かつた、それでは其の手紙は何處へ届けるのだから讀んで下さい」

「何だつて、お前、届先を聞かぬえで手紙を頼まれて來る奴も無えもんぢやねえか、どれ讀んで見てやらう」

「讀んで下さい、こんな騒動が無ければ早く届けて上げるんですけど」

「エート」

米友は仔細らしい面をして其の手紙の表を見て、

「女文字だね、女にしちやあ良く書いてゐる、なんだ……大湊、與兵衛様方小島様まゐる——おやく、此の宛先は大湊だよ」

「まあ大湊、それでは丸で此處とは方角違ひ、早く届れば宜かつた

ねえ』

『さうだな、宇治から大湊までは一息だが、此處からでは大變だ、逆戻りをして、また宇治山田の町を突つ切つて、それからで無えと大湊へは出られねえ』

『困りましたねえ、急ぎの用なんでせうか、あの女の方は大變心配さうにしてお金までつけて頼むんだから早い方が宜いだらうに、嘸頼み甲斐の無い女だと思つてゐるでせう』

『ごうも仕方が無え、災難だから、斯うなつて見ると、この手紙を届けるのも今日明日といふわけには行かねえし、その預かつた金といふ奴の行方もわからねえ。丁度封じ目も切れて居らあ、人様の手紙の中味を見ちやあ悪いけれど、斯ういふ場合だから、御免を蒙つて用向を一つ胸に納めて置かうじやねえか』

『さうして下さい、その用向によつては折角の頼みだから、わたしの身は少し位あぶなくつても、何とかして知らせて上げなくつちやあ』

『それでは、中味を一つ読んで見てやれ』

米友は捲きかけた手紙をクル／＼と擴げて仔細らしい面で文面を見つめました。

一通り眼を通してしまふと米友の面色が變ります。驚いた時にいつもするやうに猿のやうな眼がクル／＼とまはります。

『玉ちゃん、こりや大變だせ、大變な手紙だせ』

『何だえ、嚇かしちやあ可けないよ、落着いて読んでお聞かせよ』

『お前の方が落ち着かねえんだ、讀むと文句がうるせえから話にして聞かせるがね、この手紙を書いた女は、もう死んでるよ』

「おや、あの女の方が」

「どんな女の方だか俺等は知らねえけんぞ此の手紙は、つまり遺書なんだね」

「遺書」

「さうだよ、とてもわたしは此の世に望みは無いから死んでしまひます、鳥は古巢へ歸れども行きて歸らぬ死出の旅だよ」

「あゝ、それではわたしの歌を聞いて死ぬ氣になつたのか知ら、それから、どう書いてあるのですよ」

「わたしは死んでしまひますけれど、あなた様はよく御養生をなすつて下さいましといふわけだ」

「そのあなた様といふのは誰の事」

「それがそれ、宛名の、大湊、與兵衛様方小島といふ人なのよ、そ

の小島といふのは、これによつて見ると男だね」

「へえ、さういふ事とは知らなかつた」

「それでよ、就きましては此處に二十兩のお金がございます、これをお届け申しますから、これでどうか出来るだけの養生をなすつて故郷へお歸り下さるやうに」

「さうすると、向ふの人も病氣で悩んでゐるのですね」

「さうだ、これによつて見ると、慥に病氣だね、何病とも別に書いてねえが、女が勤め奉公に出て、其の血の出るやうな金を貰いで男の病氣を癒さうと云ふんだね」

「知らなかつた、それはどのお金だつたら、あの晩に届て上げれば宜かつたものを、二十兩のお金、家へ置きつばなしにして來たから、もう取り返すことは出来ない」

お玉は躍起となつて口惜しがります

「それでだね、お前、終えの方へ持つて来てよ、それお前がおはこの歌を書いてあらあ、花は散れども春は咲くよ、鳥は古巢へ歸れども行きて歸らぬ死出の旅、今あの歌が聞えます、あの歌は、はじめに行基菩薩といふ方がおつくりなすつた歌だからあれを冥土の土産に聞いて行けば心残りはないからわたしの命は今晚限り、明日は、もう此の世の人でないを書いてあるよ」

「それでは、やつぱりわたしの歌を聞いて死ぬ氣になつたのだよわたしがお手傳ひをして殺したやうなものだ、申譯がありません、どうも済みません」

「そんな事は無え、歌をうたふ方と死にたくなる方とは別々だからあやまらなくても宜い、それで終ひの方へ行つて、わたしは快く

あの世へ行きます、あの世へ行けば知つた人は幾らも居ますけれどこの世に残るあなた様にはお頼りなさる人がひとりも無いと思ふと冥路のさわりのやうな心地も致しますけれど、何事もこれまでの定まる縁……こんな事も書いてある、筆も中々美事だし文言も旨えものだ」

「さう聞いては、わたしは静止として居られない、わたしの身は、どうなつても構はない、友さん、わたしは大湊まで行くわ、行つてその小島さんとやらにお詫をするわ、斯うしちやあゐられません」  
「さうだなあ」

## 十二

船大工の奥兵衛は仕事場の中で煙草を喫んでゐました。爐の焚火だ

けが明りで、廣い仕事場がガランとして眞暗でありました。

「何とかしなくちやあ」

ひとりで呟いてゐる。

伊勢の海は晝でさへも静かなものでありました。夜になつたのでは雌波の音一つ立たないで、阿漕ヶ浦で鳴く千鳥が遠音に聞える位のものでありました。

「困つた事だわい」

印傳草のかますから煙草を詰め替へる奥兵衛は船大工の親方、年は老つてゐるが眼は光る。

「今晚は」

裏口で音なう聲

「へーい」

内で奥兵衛が返事

「あの大湊の奥兵衛さんと仰有るのは此方様で……」

「奥兵衛は家だが、お前さんは」

「古市から参りましたが」

「古市から……」

奥兵衛は立たないで耳を傾けて

「古市から、古市の何方様からお出でなすつた」

「あの備前屋から」

「備前屋さんから」

奥兵衛は此の時漸く立つて

「ごうも女衆の聲のやうだが」

戸を開けると、手拭で面を包んだ女、逃げ込むやうにして家の中へ



入つて

「此方様に小島さんと仰有るお方がおゐでございませうか」

「小島……してお前さんは何しにおゐでなすつた」

「その小島さんといふお方が居らつしやるならば、その方へお手紙を内密で頼まれて参りました」

「あゝ、さうでござんしたか」

「これが其のお手紙でございませうか」

「これが」

與兵衛はお玉の手から手紙を受取つて、

「それは御苦勞様でございます、どうか少しお待ちなすつて、其の火の傍で少しの間、待つてゐてお呉んなさいまし」

與兵衛は、その手紙を持つて家の内と外とを氣遣かうやうに見廻し

て、戸を締め切つてしまひました。

被つてゐた手拭を取つて火の傍へ寄つた女は間の山のお玉でありました。

お玉は仕事場の中へ入つて爐の傍へ寄つて、今出て行つた老爺の歸るのを一人で待たされてゐました。焚火の光りで丸太を組み渡した高い天井が白い蛇の這つてゐるやうに見えました。光の届かない家の四隅は眞暗で外では千鳥の啼く聲が淋しいのでありました。

「いやどうもお待遠様」

漸くに裏口の戸を開けて與兵衛の歸つて來たのを見てお玉はホツと息を吐きました。

「おや、お前さんは間の山のお玉さんじゃねえか」

與兵衛は今になつて其れがお玉であることに氣が着いたのです。

「え、さうでございます」

お玉は恥かしさう

「こりや、お見外れ申したといふものだ」

與兵衛は、しげくとお玉を見て

「お前はお尋ね者になつてゐる筈だな」

「え」

「何か悪い事をしたのかい」

「どう致しまして、間違ひでございます」

「さうして、こゝへ如何して來なすつた」

「隠れて參りました」

「何處に隠れてゐたんだい」

「山の方へ隠れてゐましたけれど、あのお手紙をお届けしないうら

は、氣が濟みませんから一生懸命で此處まで戻つて參りました」

「さうかい、それは御苦勞だつたな併し此の頃はお前と米友を探す  
んで網の目のやうに筋が張つてある筈だ、それを突き抜けて、よく  
此れまでやつて來られたなあ」

「はい、此方様へ參る材木の舟の中へ隠れて參りました」

「舟の中へ、それじゃ何かえ、宮川を下る筏舟の中へ隠れて此の船  
着へ來て、夜になつて忍んで此處へやつて來たといふわけだね」

「左様でございます、もうお手紙をお届け申しさへすれば、捕まつ  
ても拘りませんつもりで」

「よく屈てお呉んなすつた、それで米友も一緒に來てくれたかい」

「え、そこまで一緒に來て呉れましたけれど、ムクを尋ねると云  
つて古市へ忍んで行きました」

「米友が古市へ行つた、そいつは危ねえ」

「それから親方さん、わたしあの手紙に附てるお金をお預かり申したんですけれど、それを失くしてしまひましたから、是非そのお詫をしなければなりません」

「うむ、その事は大概わかつてる」

「ほんとうに済みません、そんな場合でわたしの身が危ないので、からどうか御免なすつて下さい」

「どうも仕方が無え」

「それでは親方さん、これで御免を蒙りまする」

「まあ待ちねえ、これからお前を一足でも外へ出すのは、籠子を篋の中へ入れてやるやうなものだ、待つておるで」

「それでも」

「何とかして上げる、今もそれお觸れが出た處で、お前と米友は盗賊の罪に落ちてゐる」

「もう捕まつても拘ひません」

「馬鹿な事を云ふな、それから、まだ用があるのだ、實はそのお前が持つて来て呉れた手紙を受取つた御當人がお前に會いてえと斯ういふのだ」

「さうでござんすか、それではお眼にかゝつて、わたしからよく譯をお話し申してお詫を致しませう」

「向ふでも聞きてえことがお有りなさるやうだから會つて行つて上げて呉れ、今おれが案内してやる」

與兵衛は、また裏口から立つて仕事場の外へとお玉を導いて出ました。

仕事場の外は暗いが右手の方の海は明かるく見えます。

大湊の海は阿漕ヶ浦には遠く、二見ヶ浦には近い、静かで蒼い阿漕ヶ浦と、明かるくて光る二見ヶ浦が、大湊の島で二つに分れてゐるやうになつてゐました。

「お玉、お前まあよく會つて話しをして見るがいゝ」

海の風が神前濱の方から吹いて來て與兵衛の聲を消す、お玉はよく聞こえなかつたから返事をしないで黙つて歩くこと暫し

「さあ、此處へ入るのだ」

入江に近い大きな材木小屋でありました。

お玉を入れると直に與兵衛は戸を立て切つてしまひました。

「手を引いてやる 暗いから用心をして來さつしやい」

船をこはした古い材木と、削りばなしの材木との累々たる間を、與

兵衛に手を引ばられて行くお玉は氣味が悪くてなりませんでした。若し相手が與兵衛でなかつたらば、お玉は一步も中へは進み得なかつたであらうと思はれます。

「お玉さん、退引ならねへ行がゝりで、俺も其の人を隠まつてゐるんだ、誰にも知られてはならないが、お前は別だから連れて來たんだ」

與兵衛が是れほどに隠まひ立をする其の人は如何なる人で何の義理があるか、それ等も亦お玉にはわかりませんでした。

「あの、何でございますか、男のお方でございますか、女のお方でございますか」

「男だよ」

暗い中を暫らく行くと、石段があつて下へくと降りて行くやうに

なつてゐました。下からは鹽氣を帯びた風が吹き上げて來るやうで  
ありました。

大湊は神代からの因縁のある古い船着であります。この小屋な  
ども百年を數へる古い建前であつて磯の香りや木の臭氣でむし  
と鼻を撲つのであります。

磯に沿うた崖と、小屋の支へになつた籠杭の間の細道を歩かせられ  
て、どうやら材木小屋の下を潜つて深い穴蔵の中へ引張り込まれて  
行くやうに思はれて來ました。

お玉は此處まで引張られて來ると何とも云へない忌な氣になつてし  
まひました。

「あゝ怖い」

意地にも我慢にも、引かれて行く奥兵衛の手を振り切つて逃げ出し

たくなりました。

「どうした」

お玉は慄えながら

「随分怖い處ですわえ」

「此んな處でなければ人は隠せない」

奥兵衛は、すん／＼とお玉の手を引いて行く。

お玉の怖いといふのは、唯場處柄が怖いといふだけではなくて、何  
だかしんじんと忌な氣持になつて行くのであります。

「誰か後をついて來るやうな足音がします」

「そんな事があるものか、さあ此處だ」

今奥兵衛の扉を開ける音で、氣が附くと、パツと燈火の光。可なり  
に廣い一間。

其中に朦朧として人が一人ゐます。

十三

微な燈火の光に朦朧として人が一人居ます。恐怖のうちにお玉の眼に映じたものは、その人が水色無地の着物を着て、坐つて俯向きになつてゐたから、蓬々と生へた月代だけが正面に見えて、面は更に見えませんでした。

俯向いて居る下に、耳盞が一つあつて俯向いてゐるのは其の人が今申でもつて面の一部分を洗つてゐるのであることを知つたのは、やつと中へ入つて一層氣を鎮めた後のことでありました。

『小島様、お使ひの衆を連れて参りました』

『それは御苦勞』

一句、地獄から引いて來るやうな聲でありました。

其の聲だけで、何となくお玉は胸へ氷を當られたやうに感するのです。

『……………』

お玉は何とも挨拶のしやうがないから其處に腰をかけたまゝで、俯向いた人の方を盗むやうにして見ると、面の一部分を洗つてゐると思ふたのは、眼を洗つてゐるのでありました。真鍮の耳盞へ、黒い巾を浸しては、頻りに眼の處へ持つて行つて、そこを叩いてゐるのでありました。

あゝ、この人は眼が悪い。

お玉は直に、さう感づいてしまひました。米友から手紙を讀んで貰

つて、手紙を受取る人が病人であらうとの暗示は得て居ましたけれど、眼が悪いのだとは気がつきませんでした。それを今此處へ来て見ではじめてさう感づいたのでありました。

「それでは、悠くりお話しなさいまし、お玉坊此處は誰も来る人も無し聞く人もないから心配をしずに、よくお話し申してお金を亡くしたお詫を申上げるが宜い、わしは家へ歸つて宜い加減時分に迎へに来るから」

「親方さん、一緒にゐて下さい」

お玉は與兵衛に縋りつきたいと思ひました。唯さへしん／＼として怖くて堪まらない處へ、見も知りもしない人と一緒に、どうして置き放しにされて居られるものか、

「あゝ、わたしは歸りませう、外へ出てしまひませう」

「何も怖がる事は無いといふのに」

與兵衛は却つてお玉の縋るのを突き放すやうに先へ出て、扉をハタと締切つて自分だけさつさと出て行つてしまひました。

お玉は取付く島がない。やつと落ち着いて見れば、悪氣で此處へ連れて来る與兵衛親方ではないし、こゝにゐる人だつて何も自分を取つて食はうといふのでも無いのだから怖ろしいうちにも、また其處へ腰をかけてしまひました。

知らない人は、まだ俯向いて眼を洗つてゐましたが、其のうちにふとお玉の眼に觸れたものは敷物の傍に置かれた大小の腰の物でありました。それで、お玉は此の人がお武家であるといふことを知つて一層心細いやうな、心強いやうな、妙に混亂しきつた心持になつてゐると

「お豊から手紙を持つて来て呉れたのはお前さんか、此方へお上りなさい」

漸く面を上げた人を見ると、瘠せた身體に蒼白い面の色が燈を受けて臘のやうに冷たく光る。

お玉は知らない。これは机龍之助でありました。

「どうも誠に申譯のない事を致しました」

お玉はお詫事から先です。

「兎も角、此方へ上がつて、誠に濟まないが此の手紙を一つ拙者へ読んで聞かして貰いたいが」

龍之助は手さぐりにして燭臺を少し動かしました。

斯う云はれてお玉はハツと耳まで赤くなつたのです。

「はい、あの」

お玉には手紙が讀めないのです。今まで讀めないで通つて来たし讀めと云はれたこともないのに、こゝへ来て恥かしい思ひをしやうとは思ひませんでした。

龍之助は、お玉が遠慮をしてゐるものでも思つたのか、

「拙者は此の通り目が不自由でな、折角手紙を屈けて貰つても其れを讀むことが出来ない、どうぞ此處で代つて讀んで見て下さい」  
静かな聲で折返して頼む。

「はい、あの……………」

お玉は困つてしまひ

「折角でございませうが、あの、わたしも目が不自由なのでございませうして」

「そなたも目が不自由」



「はい」

「それは〜」

「いゝえ、目に見えるのでございますが、字を読むことが出来ませぬ、お恥かしうございます」

「はゝあ、成程」

龍之助の面に、やゝ氣の毒さうな苦笑ひ。

「さて〜、二人揃ふて一つの目が明かぬとは……」

お玉は眞赤になつてしまつて、今宵といふ今宵、はじめて字を知らぬことの恥辱を感じたのでありました。

「それでは手紙は後の事、この手紙を届けて呉れた女の身の上を話して貰ひたい」

「はい、この間の晩、古市の備前屋といふ家へ、わたしが招かれて

参りました」

「備前屋といふのは」

「それは、あの大樓でございます」

「大樓とは」

「遊女屋」

「遊女屋、成程」

「そこへ招ばれて参りまして、其の歸りに此お手紙を頼まれたのでございます」

「其の備前屋といふのへ其許が招ばれて、何の爲に招ばれました」

「あの、歌をうたひに」

「歌をうたひに」

「はい、わたくしは、間の山へ出て居りまするお玉と申しまして賤

しい女でございます。歌をうたひに招ばれまして其の歸りに、あの家の裏口から、不意に女の方がお出でになつて、このお手紙と、それから一包みのお金をわたしに渡して、この手紙の上書にある處へ届けて呉れと申しました故、わたくしは何の氣もなくお請合を致しました」

お玉は、あの晩の筋を一通り繰返して

「さうして翌日は、早速お届けを致しませうと思つてゐる處へ、どうしたわけだか知りませんが、お役人が来て、無理にわたしを召捕つてしまはふとなさるから逃げ出して、逃げ歩いて、やつと此方へ参つたのでございます。それ故、折角のお金も打捨つて置いて、お手紙だけは懐へ入れて置いたのを、後で氣がついたやうなわけでございます。さういふわけでございますから、どうぞ御免遊ばし

て下さいまし」

お玉はお説の心のみが先に立つのでありました。

「たゞ、それだけの御縁でございます。お名前も承はりませねば、御用向も伺ひませんで」

お玉の話だけでは、決して龍之助を満足させることは出来ませんでした。

遊女屋——女——金、その次に来るものは——この手紙の中に其の消息が言ひ込められてある筈、四つの目があつて一つの用をもなさぬ此の場の有様は、やつぱりお玉をして耻ぢ且つ悶かしさに堪へざらしめたので、

「それから、あの重々申し譯がございませませんが、實は其のお手紙の中をもう拜見してしまつたのでございます」

「この手紙を、そなたは讀んで了はれたのか」

「はい」

「目の不自由だといふ和女が」

「人に讀んで貰ひましたので」

「誰に」

燈火の穂先が慄える、お玉は罪を詰られるやうな心地がして

「餘儀ないわけで……途中で水の中へ其のお手紙を落したものですからそれを乾かす時に、つい封じ目が切れまして、その時に懇意な人に讀んでいたときました、その人は内密を人に洩らすやうな人ではございませんから、どうぞ御勘辨遊ばして」

「それでは、この手紙の用向は委細飲み込んでゐるな」

「はい」

「では、其の筋を話して貰ひたい」

「宜しうございます」

お玉は、こゝで漸く度胸が坐つた、大事のくゝの人の手紙を見て、まつたことが、今までお玉の良心に、大へんな重荷であつたのを、斯うして打ち明けてしまへば、其の重荷を卸された心持になつてしまつたのです。

「でございますれども、あなた様お驚き遊ばしては可くませぬ」

お玉は唾を呑んで念を推すと

「驚きはせん」

龍之助は冷たい面の色

「このお手紙は、あの遺書になつてゐるさうでございます」

「遺書に」

「はい、それで廿兩のお金、あなた様の御病氣をお癒しなさるやうにどのお心添なさうにございます」

「さうか」

存外に冷かな響きでしたから、今度はお玉の方が満足しませんでした。

「お可哀想に、このお手紙をお書きなすつて、お金と一緒に私へお頼みなすつたあとで自害をなさつたのでございます、死んで行くわたしは定まる縁であります、生きて残るあなた様のお身の上が心配と記してあるさうでございます」

お玉の口には、頼んだ女の心が乗りうつるかと思はれるほど熱が籠つてゐたが

「はゝあ」

龍之助の張合のない事、氣の毒とか憐れとかいふやうな感情の動きは微塵も認められないのみか、聞きやうによつては、頼みもせぬに死んで呉れたといふやうにも響きましたのでお玉の胸にはむらぐと不満が込み上げて來ました。

「あの、このお方は、あなた様の御親類筋のお方でございますか、それとも御兄妹であらつしやいますか」

「親類でもないし、兄妹でもない、赤の他人じゃ」

「赤の他人でさへ、こんなにまで爲さるのに……」

お玉は、冷やかな龍之助の態度を見て、反抗的に單純な感情が高ぶつて來るのでありました。

「わたしが悪うございました、わたしが悪いのでございます」

「お前が悪いことはあるまい」

龍之助は冷々たるもの

「否、わたしが悪いのでございます、其の方を殺したのはわたしでございます、あの方は自害をなすつたのではございませぬ、わたしが手にかけて殺したのでございます」

「お前があゝの女を殺した」

「はい、わたしが歌をうたはなければ、あの方は死ぬのではありません、せんでした、わたしが歌をうたつたばかりに、これを聞いて、死ぬ氣になつたのでございます、それですからわたしが手を下して殺したのも同なじことでございます」

お玉は熱狂する

「何だか、お前の言ふ事はわからない」

龍之助は冷淡

譯らないことはございませぬ、わたしが間の山節をうたひまして、それをあの方が離れでお聞きなすつて、それから死ぬ氣になつたのでございます、このお手紙にもそれが書いてございます、鳥は古巢へ歸れども、行きて歸らぬ死出の旅と、わたしの歌が遺書の中に書き込んであるのが證據でございます」

「それは妙な證據じや、歌を聞いて死ぬ氣になつたからとて、その歌をうたつた者が殺したとはおかしい、歌ふものは勝手に歌ひ、死ぬ者は勝手に死ぬ……」

「勝手に死ぬ……」

お玉の極度にのぼつた熱狂が此の一語で一時に冷却されて、口が利けないほどに唇がブルえましたけれどそれが過ると前よりも一層逆上せて

「死ぬ者は勝手に死ぬとは、ようもまあ其の様な、お言葉が、成程わたくしは賤しい歌うたひでございますから、勝手に出まかせに歌もうたひませうけれど、お死になさる人は決して酔狂でお死になさるのではございません」

「……………」

「どういふわけか、わたくしなどは些とも存じませぬけれど、どうやら彼のお方はお前様の爲に廊へ身を沈めて、慣れぬ苦界の勤めから此世を捨てる氣になつたのでございませう、それが死んで行く時まで、あなた様の事を心配して、あの中からお金まで都合して下さるお心ざしは、わたくしなどは他で聞いてさへ涙が溢れます、それですから、わたくしは途中で自分が捕まつて殺されてもいゝから、此手紙だけはお届けしなければならぬと思ひましたのに、さう思

つて、こゝまで参りましたのに……………」

お玉は情が高ぶつて着物の襟を食ひ裂きました。

何もお禮を云はれない爲に、危険を冒して来たのではないけれども人の情に對する感謝の美しい一雫を見たいものと思はないではなかつたのに、この人は、情といふものも涙といふものも涸れ切つた人なのか。さうでなければ天性、さういふものを持つて生れなかつた人なのか、お玉は口惜しくつて／＼涙をこぼしてしまひました

「こんな薄情なお方と知つたら、手紙なんぞを持つて来るのでは無かつた」

神前沖から押し寄せる潮が二見ヶ浦を崩れて今、こゝの入江に入つて來たらしい。簞を鳴らすやうな音が聞えます。

浪の音が、上から落ちて來るやうに颯と響くと一穗の燈火がゆらゆ

らと揺れます。お玉はぶる／＼と身震ひをしました。

あんまり張が強くなつて、初對面の人を捉まへて薄情呼ば／＼をし  
てしまつたことを悔めるやうな氣になつて、今ゆら／＼と揺れた火  
影から其の人の横顔を見ると、その人は別段腹を立てた容子もない  
し、腹を立てやうとしてゐる容子もありませんが斯う火影から覗い  
て見ると、どうも何となく此の世の人では無いやうな氣がします。  
蠟のやうに冷たく光る白い面の色、水色が／＼つた紋のない着流し、  
胡座を組んで、一方を向いたまゝ、身動きさえしないで居ると、そ  
の人の身體の何處からか腥さい風が吹き出して水のやうに流れる。  
さうすると、お玉はゾツと水をかけられたやうになつて、あゝ此の  
人には生靈か死靈がついてゐる、怖い人忌な人、呪はしい人、その  
思ひが一時に混み上げて、

『歸りませう、お暇を致しませう』

座に堪えられないほど凄くなりましたから與兵衛が迎ひに來るの  
來ないのも考へて居られずに、お玉は立ちかけますと

『まあ待つて呉れ』

龍之助は靜かに呼びとめる、魔物に後髪を引き戻されるやうに、お  
玉は立ち竦んで

『何か御用でございますか』

後を振り向くと、龍之助は手さぐりにして自分の膝のまわりを撫下  
て、長い刀を引き寄せて

『折角、お使ひをして呉れた、何ぞお禮をしたいが、見られる通り  
貧乏で其の上不自由の身じや、これがせめてもの寸志、どうか此れ  
を受取つて貰ひたい』

お玉は、又も此處で奇異なる思ひをせねばならぬ、こんな薄情な人でも自分にお禮をしやうといふしほらしい心があるのか知らと思はせられたのでありました。さうして此の中でお禮とは何かと見ると刀の下げ緒の間に挿んであつたと覺しく、それを抜き出して手に持つたのは、意外にも一本の銀の平打の簪でありました。

『まあ、此の簪をわたくしに』

思ひがけないものを出されたから、お玉は三たび此處で奇異なる感に打たれたのでありました。

『これは有合せ、そなたの年頃に似合うか似合はぬか、それは知らぬ、下がり藤が絞になつてゐる筈だが、それでも差料にさはりはあるまい』

『お禮なんぞ、飛んでもない事でございます』

お玉は其れを受けやうとしなかつたが、今斯うして、簪を一本自分に呉れやうとして差出した人の姿を見ると、今の先、薄情呼ばゝりをして怖い人、忌な人、呪はしい人と一圖にムカ／＼として來た其の人の影に可憐らしいものが見え出して來るのでありました。それは、物を呉れるから好い人に見へ、呉れないからさうといふやうな心ではなく、眞底の何處にか人の情の温か味といふものが此の冷たい人の血肉の間にも潜んでゐて、それが一本の簪を傳うて流れるそのしほらしさがお玉の胸を突いて、何といふことなしにお玉は歎

歎あげるほどに動かされてしまつたのでありました。

さうして見ると、盲目になつた此の薄情な人、杖も柱もなく置かれて行く此の冷たい人が憎らしくてさうして可哀相であります。

『どうも有難うございます』



「泣いてゐるのか」

「泣けてしまひました、つい泣けてしまひました」

「何、何が悲しい」

「何かしら悲しくてなりませぬ」

「別に悲しい事も無からうものを」

「御免下さいまし」

お玉は、よゝとして其處へ泣き倒れてしまひました。

泣いてく、暫らくは口が利きませんでした。龍之助は冷然として燈火に顔をそむけて、お玉の泣くの任せて置きました。たゞ所在なげなのは、その手に持て餘した平打の簪ばかりでありました。龍之助が始めて京都へ上る時に、同じ此の國の鈴鹿峠の下で、悪い駕籠屋からお豊が責められて、その時詮方なくお豊が駕籠屋に渡さ

うとした簪が此の簪と同じ物でありました。お豊を初めて見た龍之助が、さてもお濱によく似た女と思つた後に、茶屋の老爺が拾つた平打の簪を見ると、それがまたお濱の以前の定紋と同じことであつた下がり藤であつたので、龍之助は其の簪を持つて京都まで上つて行つた筈であります。京都から十津川までの龍之助はあの通りの龍之助で、饅頭の代りに帯刀をすら差出してしまつた龍之助です。あ的一本の簪だけを今まで持つてゐた筈はありません。これは恐らくその後、龍神からお豊と共に逃れて後、お豊の手から再びわが手に入れた物であらうと思はれます。思ひ出の多かるべき筈の龍之助が、その簪に對してはさまでの惜氣が無くて何等の縁のないお玉は、その簪の爲に泣かねばならなくなりました。お玉は泣き、龍之助は泣かせて置くと、又も天上から落ちて來るやうに

浪の音が簀を鳴らして湧き立ちました。

伊勢の海は静かな海で、殊にこれより北へかけての阿漕ヶ浦は、その夕風と朝風とで名を得た海であります。南へ続く二見ヶ浦とても決して荒い海ではありませんけれど、二見ヶ浦を一足廻つて、神崎の鼻へ出ると遽に波が荒くなります。

紀州灘や遠州灘で鳴らした波が、伊勢海の平和を亂してやらうと、そこから押して来る、それを神崎の潜り島や俎島、その他、水底に匿れた無数の隠れ岩がやらじと遮るのですから、風浪險惡の夜は潮鳴りの聲が大湊まで来るのは不思議ではありません。

たゞ不思議なのは其の浪が或ひは天上から落つるやうに、或ひは地の底から来るやうに此の室には響いて来ることです。

十七姫御が旅に立つ……

これも不思議、その聲が何處から起つたか、浪と一緒にだから海から来たものであらう、微かに響いて来たのですけれども、お玉の耳には聞き洩らすことの出来ない聲。老友の好んで歌ふ歌に相違ありません。

抑自分等が、今ある此の部屋は、家の奥にあるのか、地の底にあるのか、或ひは海の岸にあるのか。

#### 十四

その前の晩、大湊へ碇を卸ろした十六反の船がありました、船の上から大湊の陸の方をながめて物思はし氣に立つてゐるのはお松でありました。

宮川と汐合川の流れ出した處が長く洲になつてゐました。大湊の町の町並は燈しつらねた人家の火で丁字形になつてゐました。それを飛々に一里半行くと宇治山田の町が火に明るいのでありました。小林の船倉から東の方へ突き出した洲崎には材木場の大きな建物が見えてゐます。町は明るいのに船倉と材木場の方は眞暗でありました。

大湊は船を造へる處であり、またそれを修理する處であるから、ここに泊つてゐる船は、この船とばかりは限らないのであります。入江の方から帆柱が林のやうに立つてゐる間を折々小舟が往來するのを、お松は其れに一々眼をつけてゐました。

お松は斯うして兵馬の歸りを待つてゐるのでした。兵馬は大神宮へ參拜するといつて船を下りたまふ、まだ歸らないのであります。

「おやく、宇治山田の方から、提灯のやうなものが澤山飛んで來る」

陸を見てゐたお松は眼を睜つて

「お祭禮でもないやうだし、あゝ、だんく、大湊の町へ近くなる」

と見ると小林の船倉あたりから、高張提灯のやうなものが、二つ三つ見え出して來たから

「おや、あそこはお船倉じやないか、お奉行様のお駕のある處だと船頭衆が云つてゐた、あそこから高張が出たのは、いよく只事でないに定まつてる」

お松が氣を揉み出した時に

「おい、皆んな來て見ろ、町で何か騒動が始まつたせ」

船中の者共は我先にと縁へ出て、さうして町の方を見物しながら

「何だ、火事か盗賊か」

「心配だから、わたし陸へ上がつて容子を見て來ます」

お松は堪り兼ねて船頭の助藏に向つて斯う云ひますと船頭が

「お前さん一人はやれない、行くなら誰かつけてやるが、まあもう少し待つて見なさるが宜からう」

「どうしても行つて見ます、あんなに騒がしいのは只事ではないから」

「そんなら誰か傳馬を押せやい、勝、お松さんを陸まで俵れてつて上げろ」

「よし來た」

水手の勝が威勢よく返事をしました、お松は傳馬に乗つて岸へ行く爲に通ひ口から出直して傳馬に乗るべく元船を下りて行きました。

その後で船頭、親仁、水手、揖取等が

「成程、宇治山田の町では此の頃火の用心が嚴しいといふ事だ、山へ逃げ込んだ悪者が火を放けに來るといつて、廻状で用心してゐたつて、事によると其の火放けの悪者でも追込んだかな」

「さうかも知れねえ」

「待つて、汐合の水門から傳馬が一艘無提灯で此方へ來るやうだぞ」

「お松さんの舟じやあるめえな、エーと宇津木様の舟が歸つて來たのだらう」

「さうだらう」

「材木場を取り捲いた提灯が一度に海邊へ出たぞ、海へ何か抛り込む音がするやうだ」

「海へ逃がしちやあ些と捕りにくいな、水が利く奴だと陸より海の方が餘程逃げいゝから」

「やれ〜、御用提灯をつけた舟が二三ばい漕ぎ出したぞ」

「こりやあ向ふ岸の火事で済ましちやあられなくなりさうだ」

此の時早櫓でもつて、矢を射るやうに此の若山丸の船腹近く漕ぎつけて来た一隻の傳馬は、篝火もなし、提灯もなし、ほとんど船の人も氣がつかないでゐるうちにこの船の腹の處へすうつと漕ぎ着たのでありました。

「おーい、船頭の助藏ごんはゐるか」

「うむ、俺をお呼びなされるは誰れだへ」

「船大工の與兵衛だ」

「お、與兵衛ごんか」

「大急ぎで頼みてえ事がある、通して貰ひてえ」

「合點だ、それ梯子を下ろしてあげろ」

船大工の與兵衛老爺と此の船の船頭の助藏とは熟魂の間柄と見えました。

船へ上がつて来た與兵衛は、助藏の耳に口

「助藏ごん、何にも云はずに人を預かつて貰えてへのだ」

岸まで行つて見たけれども、お松は其處で兵馬に會うことが出来ませんでした。

船番の人に言傳があつて、歸るつもりであつたけれども山田の町にもう少し足を止める必要が起つたから歸れぬとの事でありました。それを聞いて、お松は安心をして、元船へ歸るべくまた舟を漕ぎ戻

して貰ひました。

十五

山田の町を道庵先生が今お伴を一人つれてのこゝと歩いてゐます。道庵先生とだけでは、此の土地の人にはよくわかるまいが下谷の長者町へ行つて十八文の先生といへば誰にもわかるのであります。

「先生、お薬禮は幾ら差上げたら宜しうございませう」と聞くと

「あ、十八文置いて行きな」

と答へる、それで十八文の先生、一名安いお醫者さんで有名なのであります。この十八文の爲には、與八と組打までした騒動があるのであります。お松なんぞも此の先生のお蔭で命を取り留めたのであ

りました。その道庵先生が一僕を召しつれて、ほく／＼と伊勢参りなんぞと洒落込んだのであります。

「仙公、今夜は何處へ泊るべえな」

道庵はお伴を振り返つて酒臭い息を吹きかけました。道庵先生が酒臭い息を吹きかけてゐるから天下が泰平なのであります。

「さうですな、千束屋か牛車樓あたりへドンなものでげす」

お伴の仙公は額を叩く。仙公といふ男は江戸から道庵先生が伴れ来た野幫間とまでは行かない代物であります。道庵先生は此の仙公がお氣に入りといふわけでも何でもなく、伊勢参りに出かけたくなつてゐる矢先へ、是非お伴を仰せつけられたいものでとか何とか云つて来たものだから、よし伴れてつてやるといふわけで、引ばつて来たものであります。

「俺や、そんな處は忌やだ」

道庵先生の駄々。

「お嫌ひでげすか、先年は彼處で彌次郎、衛喜多八の兩君が、首尾よく大失敗をやらかしてみんな事江戸つ兒の面へ泥を塗つてしまつた處でゲス、そこで此の度は道庵先生と仙公とが相提携して、その名譽回復などは如何が御座ますな、せひお伴を致したいものでゲス」

「彌次と喜多が器量を下げたのは彼處かい、よしさう聞いちや俺も道庵だ、奮發する、十兩も奮發して大に遊ぶ」

「それは頼もしい事で、併し先生、十兩とクギつて奮發なさるのが可笑しうげすな、トテも江戸つ兒の腹を見せるんでげすから百兩とか千兩とか仰有つて戴きたいものでげすな」

「馬鹿を云へ、俺は十八文の先生だ、勿體なくつて其んなに金が使

へるか」

「これは恐れ入りました」

「十八文の先生の俺は道庵だ……」

「因りましたな、先生、さう十八文十八文と仰有られたんでは、定まりが悪くつて」

「ナニ定まりの悪いことがあるものか、盗みも隠しもしねえ、十八文の先生は俺だ、藥禮を十八文づゝ取つて、その金をチビ／＼貯めて、それで伊勢参りに來たんだ、十八文がどうした」

「解りましたよ、あゝ冷汗が出ちまつた」

仙公としては、これで大いに江戸つ兒で納まつて行きたい處なのであります。それを道庵先生が十八文々々といふものだから、自分までが安く見られるやうな氣がして、弱りきつて山田の町を歩いて行

くのでありました。

道庵先生と仙公とは斯うして山田の町を歩いてゐたが、途中で道庵先生がふいと一軒の店へ立ち寄りしました。その店は提灯屋でありました。

「今日は、提灯を一つこしらへて貰いてえが」

「へい、お出でなさいまし」

「提灯の安物を一つ」

「提灯は、小田原でございませうか、ブラで宜しうございませうか、弓張に致しますか、それともまた別にお好みでも」

「ブラが宜いね、ブラ提灯の成るだけよくブラ／＼する奴を」

提灯屋は、先生酔つてるなど思つて可笑がると、道庵先生は店前へ腰をかけてしまひました。仙公も仕方が無いから其の傍に立つて、

今こんな處で提灯を誂へなくても宜かりさうなものをといふ面をして居ます。

「仙公や、提灯が無くては何かにつけて不自由だから、こゝで一つ仕込んで行くのだ、お前好いのを見立てな」

「いろ／＼出来合がございませう、お好みによつてお印を即座に入れて差し上げます」

「先生、このブラ提灯のブラ下が具合が乙でげすから、これに致しやせう」

「よし／＼、それにしやう」

「さうして、お印は如何致しませう」

「先生の御紋は何でございましたつけね」

「定紋なんぞ付けるには及ばねえ、そこん處へ十八文と書いて呉ん



な

「また始まつた」

「十八文と入れますんでございますか、こゝへ、たゞ十八文だけで宜しうござんすか」

提灯屋はオカしな面をして道庵先生の面を見上げる。

「さうだ、十八文で宜いのだ」

「先生、およしなすつた方が宜うござんすせ」  
仙公は苦り切つてゐる。

「ナニ構はねえ、俺が承知だ」

簡単な文句ですから、提灯屋は手提のブラ提灯へ早速「十八文」と入れてしまひました。

「さあ、仙公、これをつるして歩け」

「驚きましたね」

「驚くことは無い、提灯が取つて食うと云やしまらし」

「それじゃあ先生、斯うして疊んで懐中へ忍ばせて持つて参る事に致しやせう」

「馬鹿を云へ、さうして吊るして歩くんだ、これから蠟燭屋へ行つて百目蠟燭の太いのを買つてやる」

「冗戯じやありません、晝日中提灯がつけて宇治山田の町を歩けるもんですか」

「馬鹿をいへ、暗い處を提灯をつけて歩く分にや誰だつて歩く、日中提灯を點けて歩くから其處に味ひがあるのだ」

「あんまり味ひもありませんねえ」

「愚圖々々云はずに早く歩け」

「弱つたなあ」

「弱ることは無え、貴様はたいこもちの出来損なひだ、それがこゝでちやうちんもちに出世したんだ、有難く心得て持つて歩け」

「先生、提灯は宜うござんすが、この十八文といふ文句を見ると、しみじみ情なくなりますなあ」

「何で十八文が情ねえ」

「だつて先生、十八文じゃあ、あんまりあたじけねえ」

「馬鹿野郎」

道庵先生は仙公の頭を一つばかりと食らはせました。

「こりや驚きましたねえ、何ぼ拙者が仙公にした處で、お打ちなるのは酷うげすな」

仙公は頭を抑へて不平を云ふ。

「打つたがどうした、十八文は俺の看板だ、その看板を情ねえの、

あたじけねえのケチを付けやがつて、太え野郎だ」

道庵先生はブン／＼憤つてゐます。

「そりやあね、先生、成程先生は藥禮を十八文と定めてお置きなされる、それは結構なことでございます、そりやあまあ、それで宜うございませす、宜うございませすけれども、何も旅へ出てでございませすなそこで矢鱈に十八文々々々と仰有つて、拙に冷汗をお搔かせなされるには當るまいじゃあございませんか、それもまあ宜うござんす、拙が一人胸に納めてありやあ、それで世間の人は何も知りませんや、さう思つて無念を詠へて忍んで居りますと宜い氣になつて、提灯へまで十八文と書いて、それを晝日中持つて歩けといふのは何ぼ何でもあんまり情ねえじゃあござんせんか、いくら旅の恥は極き捨てたと

申しましても、それじやあどうも泣きたくなりますなあ」

「馬鹿野郎、ドコまで馬鹿だか貴様の馬鹿さの底が知れねえ……」

「此方も底が知れねえ……」

「何だど」

「いゝえ、何でもございません、ねえ先生、斯うして旅へ出て來れば、先生様は御番料を千俵も戴くお醫者様で拙は藏前の旦那衆といふやうな面をしたつて誰も咎める者はござんせん、ワザく十八文と書いて、暗やみの恥を明るみへ出さすとも……」

「何だ、この野郎、もう一遍云つて見ろ」

「暗黒の恥を明るみへ出さすとも」

「さあ、また承知が出来ねえ」

「さうお怒りなすつちや話しが出来ません」

「暗闇の恥とは何だ、さあ仙公、いつ俺が暗闇の恥を明るみへ出した、さあそれを云つて貰ひてえ」

「だつて先生、この十八文……」

「十八文が如何したと云ふんだ、俺は十八文の醫者に違へねえ、十八文が十八文といふのが何で恥だ、さあ其れが聞かして貰ひてえ」

「さう理窟を仰有つちや困ります」

「何も理窟を云ふわけじや無え、十八文が十八文で、十八文で暮らしを立て、その十八文の中からチビチビ貯めて、それで伊勢參りに來たんだ、それを思ふと十八文様々だ、有難くつて涙が雫れらあ十八文のお蔭で斯うして俺は伊勢參りにも來られるし、甘い酒の一杯も飲めやうといふものだ、その冥利を思へば十八文様に黙つてあちやあ濟まねえ、それだから提灯へおうつし申して御一緒に太神宮

様を拜ませやうといふ了簡なんだ、それを貴様は情ねえの、あたじけねえのケツを付けやがつて承知しねえからさう思へ」

「それはそれに違ひありませんがね先生、さう物事をアケスケにやつてしまつては實も蓋もありませんね、たとへ十八文にした處で百兩百貫のやうな面をして……」

「まだ解らねえ、この野郎、言つて聞かせてやる、恥といふのはな學問の無へ奴が有るやうな面をしたり錢の無へ奴が有るやうな面をしたり薄つべらな奴が厚つべらの面をしたり、そんな奴が恥といへば恥なんだ、十八文は些とも恥でねえ」

「左様ですかねえ」

「さあ持つて歩け、ちやうちんもちといふ奴はな、貴様のやうな薄つべらな人間でも大臣大將の先に立つて歩けるんだ、増長しちや行

けねえぞ、手前がエライから先に立てるんじやあねえ、お提灯様のお蔭だぞ、手前のやうな野郎でさへそれを持っては、道庵先生の先へ立つて歩ける、さあ／＼有難く心得て持つて行け／＼」

仙公は泣きさうな面をして十八文の提灯を取り上げると提灯屋の者は腹を抱へて笑ひました。

仕方がなしに仙公は十八文の提灯をブラ下げ、道庵先生は宜い氣になつて山田の町を通つて行くと、町の中程で

「先生、道庵先生じやございませんか」

大きな宿屋の二階から呼び留める聲

「おや」

道庵先生見上げると、品の宜い切髪の美人が欄干の處に立つて、此方を見て笑つてゐますから

「やあ妻戀坂の女將軍！」

と云つて先生は二階を見上げて立ち止まつて

「此方に御逗留か」

「先生も御參宮」

「はい〜」

「お宿は」

「宿はまだ定まらねえ」

「そんなら、こゝへお泊りなさい、お相宿を致しませう」

「そりや有難い」

「先生、そりや何です其のお提灯は」

「は、これ此の通り」

道庵先生は大自慢で今買ひ立ての提灯を仙公の手から取つて二階の

美人に見せました。

「十八文！忌ですわねえ」

「こいつも話せねへ」

「見つともないから、其んな物を持つて歩くのをおよしなさい」

「それでも此の野郎が持つて歩きたいといふから、わざ〜持つて

歩かせるのさ、この野郎は仙公といつて……」

「先生、餘計なことを言はなくつても宜いじゃありませんか、早く

行きませう」

「さあ行かう」

仙公は女の手前、道庵先生がどんな事を喋り出すか危険でたまらないから、袖を引ばつて早く連れ出さうとしました。

「あばよ」

道庵は二階の美人を振り向く

『待つてゐますから早く行つてゐらつしやい』

仙公に擔がれるやうにして道庵は漸く小田橋の處へ來ると橋の袂へ寄つかゝつて好い氣持に寢込んでしまひました。

『おや、先生、こんな處へ眠つてしまつちやちやいけませんねえ、

おや／＼もうグウ／＼鼾をかいてゐる』

道を通る人は行き倒れではないかと思つて覗いて行くから仙公は極りを悪がつて、いくら起しても起きやうとはしませんでした。

『酔つぱらうと何時でも此れなんですから遣りきれません、決して怪しいものじやございません』

仙公は往來の人へ頻に言ひ譯をして、

『先生、こんな處へ寢込んでやあ困りますねえ、何とかして下さい』

仙公を可哀想だと思ふなら起きてやつて下さい、もし先生』

『ムニヤ／＼／＼』

## 十六

二階で見て居た切髪の女、それは傳馬町の旗本神尾の先代の愛妾お絹であります、お絹はお松を養つて、今の神尾の家へ奉公に出した妻戀坂の花のお師匠さんであります。

お絹は今、按摩に肩を揉ませながら

『按摩さん、あの間の山のお玉とやらの詮議は、どうなりました』

『へえ、あの一件でございますか、あれは貴女、捉まりましたございませう』

「エ、捉まつた、あの備前屋とやらで賊を働いた女の子が」

「いゝえ、お玉の方は何處へ逃げたやら行方知れずでございますがそれと相棒の米友といふ奴が大湊の濱で埋まりましたさうでござい  
ます」

「米友といふのは、この間竿を振り廻して古市の町を荒らした網受の小さな男だね」

「エ、さうでございませす、それが大湊の濱邊へ海から泳ぎついた處を隠れてゐた役人が大勢して、やつこの事、生捕つたさうでございませす」

「それで泥棒の罪は白状したのかね」

「處が、剛情な奴で、お玉の行方も申し上げなければ、お玉こ手引をさして自分が盗んで居ながら、自分の盗んだ事は愛にも白状をし

ないので、お奉行所でも手古摺つてゐるさうでございませす」

「では、その米友といふ小男は、どうしても自分が盗まないと云ふんだね」

「左様でございませすとも、自分も盗みなんぞをした覚えはないし、お玉だつて決して盗みをするやうな女ではないと、あべこべに啖呵を切つて役人達をまくし立てゝゐるさうでございませす」

「さうして見ると、ほんとに彼の二人が盗つたわけじや無いんだらう」

「何、それはもう證據が上がつてゐるんでございませすから仕方がありません、お玉の家にお侍衆の印籠もあれば、それに彼んな處にあるべき筈でない二十兩といふお金もあつたんでございませすから、事によると二人がグルでやつたのかも知れませせん、さうでなければ米

友がお玉を隠し廻る筈が無いのでございますからな』

『どうも其の印籠やお金が女の子の家に轉がつてゐたといふのは怪しいけれど、わたしは如何も、あの二人の仕事では無からうと思つてゐる』

『大きに……この町でも二通りの説がございますして、お玉や米友は決して盗みをするやうな奴等では無いといふものと、でも證據が上がつてゐる以上は彼奴等の仕事かも知れないと斯う云つてゐるのど半々なのでございます』

お絹の伊勢へ来たのは一人では有りませんでした、今は一人で残つてゐるのであります。その連といふのは番町の神尾の邸へ集まる例の旗本の次男三男のやくざ者が五人、それにお絹共に女も三四人

人交じつてゐたのであります。最初の晩、備前屋でお玉を呼んで間の山節を聞いた若い侍達といふのは其れ等の連中で、そこで全然持物を盗られてしまつたといふのも其等の連中でした。

お絹の一人だけ後に残つた理由としては此の盗難の跡始末を見届けに行きたいといふことが一つでありました。

按摩が歸ると薄化粧をして、身なりを念入りにととのへた、お絹の品のよい被布の姿はこの宿屋から出て、酔つばらひのお醫者様が來たら、部屋へ通して酒を飲ませて置くやうに宿へは言置をして自分は、直戻るやうな面をして何處へか出かけて行きました。

## 十七

噂の通り米友は大湊の濱でつかまつてしまひました。



竿を持たせ、その米友だけれど、素手で水の中を潜つて来た處を折重なつて押へられたのだから、目覺ましい抵抗も試むることが出来ないで繩にかゝつてしまひました。

いろ／＼に調べられたけれども遂に白状しません。白状すべき事が無いから白状しないのを、それを剛情我慢と悪まれて、餘計に苛められるものですから、米友は意地になつて役人を手古摺らせてしまひました。

お玉の家にあつた印籠と、甘雨の金とが唯一の證據となつて、それに就て辯明すべきお玉が居ないのだから、調べ方の有利に解釋されて、米友にはいよいよ不利益な證據になつてしまひました。そこで米友は遂に盗人と、それから町を騒がしたといふ二つの罪でお仕置を受けることになりました。

繩がキリ／＼と肉へ食ひ込んで、身體が瓢箪の様になつてゐる米友は隠れが岡へ引ばられて行く道で。

「米友が来る、米友が来る」

宇治山田の町では縛られて通る米友を見やうとて道の兩側へ眞黒に人立がしました。

米友はこれから隠れが岡といふのへ引張られてお仕置に會ふのでありませぬ。

宇治山田の神領では血を見ることを忌むから、刑罰の人を殺すには刃を用ひないで隠ヶ岡から地獄谷といふのへ突き落してしまふのが掟でありました。

引かれて行く米友を見物してゐる町の人々のうちにはそれを氣味悪く思つてゐるのもありました、多分冤罪であらうとひそかに同情を

寄せてゐるのもありました、それ等の見物の中に一人、旅の姿をした男が笠を傾げて、人混の中から、取り別けて念を入れて米友の姿を見、それに對する評判を聞いてゐるものがありました。その旅人は一夜に五十里を飛ぶ怪足の七兵衛でありました。

「盗人でございますつて」

七兵衛は自分に最も手近で、さうして最もよく話をして呉さうな見物人の一人をつかまへて斯う尋ねました。

「え、盗人でございます」

「何を盗んだので」

「お侍衆のお金と持物をそつくり」

「何處でやりました」

「古市の備前屋といふので」

「備前屋で」

「お侍衆が音頭を見物しておゐでになる時に」

「あの男が」

「左様」

「本當に、あの男がやつたのでございますかね」

「證據があるんでございます」

「その證據といふのは」

「梨子地の印籠に廿兩の金」

「はてな」

「彼奴の外に相手が一人あるんでございます」

「相手といふのは」

「それは女でございますよ」

「女」

「間の山へ出てゐるお玉といふ女」

「へえ、そりや……」

「それで女の方は捉まらず、彼奴だけが捉まつたので」

「それで、何でございませうか、もう白状したのでございませうか」

「剛情者ですから白状しないんでございませう、けれども證據がありますから」

「それで如何なるんでございませう」

「これからお仕置になるんでございませう」

「お仕置に」

「隠ヶ岡といふのへ連れて行つて、あれから下へ突き落すのでございませう」

「は——て」

「こちらは御神領でございませうからお仕置にも血を見せないやうにしてそれで隠ヶ岡から下へ突き落すのでございませう」

「は——て」

七兵衛は過ぎて行く米友の後影を伸び上がつて見てゐましたが

「そいつは困つた事が出来た」

「何でございませう」

「いえ、ナニ、白状しないものを、お仕置にかけて若し本當の盗人が出た時には困りませうなあ」

「それは困りませうなあ」

「何ですか、その隠ヶ岡のお仕置場といふのは誰でも見せて呉れませうか」

「山の下までは行けますがね、お仕置場の處へは入れませんか」

「へえ」

「併し、山の下を廻つて行けば行けないことはござんせんがね、そこは晝もお化の出る古池で、人間の骨がゾク／＼してゐますから、トテも行かれませんか」

「左様でございますかね」

「それから其の隠ヶ岡の下では拜田村の藝人が澤山集まつて彼の男の命乞をするといつて騒いでゐるさうでございますが、もう斯うなつてはお取上になりますまいよ」

「左様でございますかね」

「彼奴も根は正直者なんですが、ひよいとした出来心であんな事をしてしまつたんでせう。可哀相といへば可哀相ですよ」

「それは氣の毒な事をしました、どうも大きに有難う」

七兵衛は此れだけの話を聞いて、何と思つたか、來かゝつた道を逆に歸つて、米友のあとを追うて、見え隠れに何處までもついて行き「こいつには困つた、まだ／＼俺も此處いらで年貢を納めたくは無えのだが……」

七兵衛が斯うして隠ヶ岡の下まで來ると、不意に一頭の狂犬が現れて烈しく吠えかゝりました。

「叱ッ、叱ッ」

石を拾つて打たうとすると其の手許へ犬が飛んで來ます。

ムク犬は何處を如何して來たか、ゲツソリと瘦てゐました。飛びかゝる足許さへ危ない位に瘦せてゐましたけれども猛犬はやはり猛犬でありました。

「叱ッ、叱ッ」

七兵衛は先を急ぐことがあるのであります。落ちてゐた竹の棒を拾つて一打と振りかぶると、犬は其の手へスーッと飛んで來ました。あぶない、其の手を渡つて來て肩先へ噛みついた——七兵衛が少しく身を替はしたから、ムクの齒は七兵衛の肉へは透らないで、七兵衛の合羽の上を食ひ破つてしまひました。

「此ん畜生、狂犬だな」

七兵衛は合羽へ食ひ付いた犬の首を抱へるやうにして、力任せに後へ取つて捨てる、瘦て弱つてゐた猛犬は七兵衛に後へ取つて捨てられて、挫と倒れたが、クルリと起き上がつて、二三步退いて兩足を前に合せて、さうして凝と七兵衛の面を睨んでッオーと唸りつけてゐました。

その形相を見て七兵衛は此の犬が並一通りの狂犬ではないことを知りました。

「ムクだ、ムクだ、ムクが出たぞ、何處から出て來たのだらう」

早くも土地の人が騒ぎ立てました。先日古市の町を騒がしたムク犬は、あれつきり何處へ行つたか行方知れずになつてしまつたのを、こゝで偶然に姿を現はして、また土地の人を騒がせました。

「何處に居たんだらう、あの犬はありや、尾上山の後に隠れてゐたんだせ」

「瘦せてるな、もとは熊のやうに肥つてゐたが今は狼見たやうだ」  
「あの旅人は、ありや何だ、見慣れない人だが、氣の毒だ、お役所へ沙汰をしやうじやないか、あん畜生はホントに狂犬になつたんで

通る人の見さかひもなく、あゝして嘔み付くんだ、うつかり傍へ寄ると危ねえ早くお役所へ沙汰をしやうじやないか」

お役所、お役人といふ聲を聞くと、

「エ、面倒臭い」

七兵衛は急に焦れつたがつて飛びかゝつて来た犬の眉間の處を、拳を固めてガンと打ち据えて自分自身を翻して一散に元来た方へ走せ出しました。七兵衛に打たれて後へ飛び退いたムクは、起き直るや、驀然に七兵衛の跡を逐ひ駆けます。

氣の毒な米友は、この騒ぎのうちに隠ヶ岡から地獄谷へ突き落されてしまひました。

役人も非人も刑の執行を済まして今ゾロ／＼と山を下つて歸つて來

十八

道庵先生は宿屋をウロつき出してしまひました。どうして先生の氣象でジツとしてゐられるものではありません。

それにお絹の宿屋で上等の酒を飲ませられたものだから、有頂天になつてしまつて、ひよろ／＼と宿を出かけました。

たゞ宜い心持で歩くのですから、何處へ如何行くかわかつたものではありません。その中に人家を離れて、河沿の堤見たやうな處へ來ると、グンニヤリと其處へ倒れてしまひました。

倒れたきりで仰向けに臥て醉眼をトロリと見開いて見ると、夜氣爽

かにして洗ふが如きうちに、星斗欄干として天に満つるの有様です  
から、道庵先生、ズツと氣象が大きくなつてしまひました。

「あゝ、宜い心持だ、長安の大道酒家に眠るといふ意氣は此れだ  
ナニ此處は長安の酒家じゃ無え、酒家でも堤の上でも其んな事は構  
はねえ。エ——ト天子呼び來れども船に上らずか——俺の處へは、  
まだ天子様からお迎へは來ねえが、大名旗本にはこれでお得意が大  
分あるんだ、大名旗本呼び來れども診察に行かずなんて、そんな野  
暮な事は俺は云はねえ大名旗本で有らうとも、穢多非人であらうと  
も十八文よこす奴は皆んな俺のお得意様だから何處へでも行つてや  
る、矢でも鐵砲でも持つて來い」

先生、ひとりで大氣焰を上げてゐる。

「どうして、世の中が斯う面白いんだか、世間でクヨクヨしてゐる

奴の氣が知れねえ、おしなべて天下の事が十八文で定まりがつくん  
だ、十八文より高くもなし、さうかと云つて十八文より安くもねえ  
安いと高いは買ひ様による」

何だかロジックが變になつて來ました。道庵先生は愈好い心持で  
ウトウトとしてゐると、三味線、胡弓と太鼓に合せた伊勢音頭が、  
河波を渡つて道庵先生のウトウトしかけた所へ、それがたう／＼た  
らりと流れ込むので、先生の好い心持を、またもう一層好い心持ち  
にして、遂い其のまゝグツスリと夢に入つてしまひました。  
暫くすると、この折角の好い心持になつてゐた道庵先生が、

「ア、痛」

いやと云ふほど、頭を蹴飛ばされてしまひました。  
十八文で有頂天になつてゐた先生も頭を蹴飛ばされれば、やはり痛

いから、痛ツと云つて見たが、頭を抑へるのも氣が利かないと見え  
て、申し譯に痛いと言つたゞけでまた眠つてしまはうとすると其の  
上へドサリと折り重なつた者がありました、いくら道庵先生でも踏  
んだり蹴たりでは駄つて居られない。

「誰だ、誰だい」

周章で刎起きると、

「どうも相済みません、どうが御免なすつて」

折重なつて倒れかゝつた人は、低い聲をして叮嚀に道庵先生にお詫  
を申します。

「氣をつけて歩きねえ」

「どうが御免なすつて」

暗い中を通りかゝつて、ふと道庵先生の身體に睨いて倒れたものと

見えしました。折角の夢を破られて、道庵先生の酔ひも少し薄らいで  
居た處へ、夜の河風が襟元に吹き込んだもんだから、眼がさめて大  
きな欠伸をしました。見ると、一人の老人らしいのが小さな男を脊  
中に引かけて、頻りに道庵先生にお詫をする。

「お怪我はございませんでしたか、つい此の通り病人を抱えて居り  
ますものでございますから」

「別に怪我も無えが随分驚いたよ」

「どうも相済みません」

老人はお詫を云つて、道庵先生を取なして、あへぎく向ふへ行か  
うとするのを、

「おい、待たなく」

道庵先生が呼び止めました。



「何か御用でございますか」

「今、お前さんは病人を抱えて居ると云ひなすつたな、病人をつれて何處へ行くんだい」

「へい、あのお医者様の處まで……」

「お医者様、お医者様なら此處に居るく」

「へえ」

「お医者様なら此處に一人居るよ、極安いのが一人居るよ」

まだ、先生も決して酔が醒めては居ないのでした。

小男を脊中へ引かけた老人は、暗い中から透して見ると、成程其の人は茶室頭をして、お医者さんの格好をしてゐるから。

「貴方様はお医者様でございますか」

「斯う見えても醫者は醫者だよ、醫者は醫者だが薬箱持たぬ」

醫者には違ひないらしいが酔つてゐることは確かでありました。酔つてゐても何でも醫者でありさへすれば、急病人にとつては渡りに舟であります。行きかけた老人は、幸こゝで見貫はうか、どうしやうかと暫らく思案の體であつたが、すぐに立ち戻つて、

「急病人でございますが、一寸、見ていたゞきたいもので」

「おつと、承知、さあ病人を此處へ出したるく」

通りかけた老人も初めは何だか薄氣味悪く思つたやうでしたが、道庵先生が至つて氣輕で其の上に酔つてゐると見たものですから、安心したものと見えて、脊にかけて居た小男を其處へ卸します。

「何だい、病氣は」

「へえ……あの癩疔でございます」

「癩疔、どれく、おや、まだ子供だな、いやさうでも無い、大人

かな、さうでもない、年老見たやうでもある、可笑な野郎だな」  
 道庵先生は裸體で氣絶してゐる小男の身體に眼を擦りつけて一通り見て

「冗戯じゃ無え、こんな癩瘡があるものかい、これは打身だ」

「え、……」

「高い處から落つこつたんだい、それも些とやそつと高い處から落ちたんじゃねえ、野郎喧嘩をしたな、喧嘩をして簀捲にされて高い處から突き落されたんだ、これこゝに繩のあとがある、繩でギュー／＼引括られて突き落されたんだ、人を馬鹿にしてゐやがる」

「先生、それに違ひありません、どうかお静かに願ひます」

「お静かに、よしそれでは静かにしてやる」

道庵先生は、わざと段違ひの低い聲をする、

「まだ脈はございませうか、見込はございませうか」  
 身體を一通り撫で、見た道庵先生が

「有る！」

「有りますか」

「生きる！」

「ほんとに生き返りますか」

「大丈夫！」

「助かりますか」

「助かる！」

「どうか助けてやつてお呉んなさいまし」  
 老人は意氣込む、

「あたり前の野郎なら、助かりつこの無え處だが、此の野郎のは助

かるやうに出来てゐる」

「へえ」

「息を吹き返させるのは雑作は無えが、その前に痛み所を繕つて置かねへど、息を吹き返してから却て苦しがる」

「へえ」

「先づ肩體骨が外れてゐる、それで左の手がブラ〜だ」

「へえ」

「頸椎には異状がない」

「胸脇の骨が折れて肺へでも觸らうものなら見込はないが、そこにも異状がない」

「へえ」

「腦蓋といつて頭の鉢を打ち割ればこれも望みはないが、幸に其の

鉢の頭も無事だ」

頭の鉢といふのを鉢の頭といつてのけました。當人は氣がつかないで済まして居たが、傍の老人は此の場合にも可笑しさを噛み殺さずには居られませんでした。

「腰骨にも横骨にも之れまた異状はない、右の方の脛の骨が折れて居る」

「へえ」

「其の外、身體中、處嫌はず、打創かすり創だが、それ等は大した事はない」

オカしなお醫者さんだけでも、其の診方の親切なことを、さうして暗い中で、何處が如何、此處が斯うといふことを掌を指すやうに云つて見せるから、はじめは險呑がつてゐた老人が、そぞろに信頼

の念を高めてしまひました。

「おい、お爺さん此の人を斯うして押へてお出で」

道庵先生は小男を半分起して、其のブラリとした左の手を持つて腋の下へ指を當がひ、下の方へ締つけるとブラ／＼してゐた手は忽ち元のやうに引かゝります。

懐中紙入を出す時、一挺の剃刀のやうなものを引き出して、それで身體のあちら、こちらを一寸二寸づゝ、ス／＼と切つて廻る。

「お爺さん、手拭を持つてゐるかい、その手拭を河原へ行つて濡らしてお出で、絞らないでいゝよ、それから足へ捲く布が欲しいな、その三尺で結構、ナニ晒しを持つて來たつて、そんならなほ結構」  
道庵先生は折れた右足の脛を晒で捲く、濡らして來た手拭を頭と顔へ捲いて肩井を揉んで脊を打つと

「うーん」

「そろら生き返つた」

「生き返りましたか」

「早く家へ連れて行つて寝かして置け、明日また俺が行つてやる」

「有難うございます、明日も來て下さいますか」

「行つてやることも」

「有難うございます、大湊の船大工で與兵衛とお尋ねになれば直おわかりになりますから」

「大湊の與兵衛、よし來た」

「それから先生わたしが斯うして此處で先生のお世話になつた事はどうぞ御内分に、人に知られると困るんでございますから」

「病人の事をベラ／＼喋る醫者があるものか」

道庵先生はまた堤の上へゴロリと寝てしまひました。

## 十九

お絹は二見ヶ浦の海岸の清涯亭といふ宿の離れにつゞいた四阿の  
 中で長い事人を待つてゐるのであります。やがて、編笠を被つて海  
 岸傳ひにやつて来る一人の武士がりました。

武士は松林の中を歩んで来る、お絹は、それを迎へるやうに松林の  
 中へ入る。武士といふけれども、まだ極く若い人のやうであります

「宇津木さん、此處よ」

若い武士は歩みをとどめて笠を傾げて此方を見る。

「お前様は」

「え、お松の假親のわたくしでございます。さつきから待つて居  
 りました」

「……………」

この武士は宇津木兵馬でありました。兵馬は呆れたやうな面をして  
 お絹を眺めたまゝで立つてゐます。

お絹の方は、一向平氣らしく、

「宇津木さん、定めて又かとお驚きなすつたでせう、けれどもね、

今度は前とは違ひますよ、前とは違つて眞剣に貴方にお話しをして  
 上げなければならぬ事があるのですから」

「お前様は御身分柄にもないことをなさる、嗜まつしやるが宜うと  
 ぞるぞ」

兵馬は苦りきつて尙ほお絹の面を睨めて居ると、

「そんな悪戯をするつもりでは有りませんでしたけれど、つい貴方のお姿を見たものですから、こんな事になつてしまつて」  
 兵馬の眞面目になつて、苦りきつてゐるのが此の女には却て面白いこと  
 のやうに見えるらしく、

「この間、古市の町で、脊の小さい男が竿を振り廻してゐた時、それへ槍をつけたのは宇津木さん貴方でせう、運悪くそれをわたしが  
 見ちまつたのですよ、珍らしい處で珍らしい人に會つて、わたしは何  
 だかゾクゾクと懐しくなつてしまつたものだから、あれからちや  
 あんと、貴方の行方を突き止めて居たんですよ、さうして又あの手  
 紙を上げて、貴方を此處までお呼び申したのですよ、よく來て下さ  
 いましたね、ホ、」

自分が綱を引きさへすれば兵馬などは、どうでもなるやうに、呑み  
 きつてゐる物の言ひぶりでしたから兵馬は勃然として、

「お暇を申す」

袖を振つて歩き出すと、

「そんなにお怒りなさるものじやありませんよ、まさかわたしの名  
 で手紙も出されませんかから七兵衛さんの名を借りて貴方をこゝまで  
 お呼び申したのは、貴方からはお松や何かの行方も聞きたいし、わ  
 たしからは是非共貴方にお知らせ申したいこともありますから……」  
 兵馬は其んな言葉を耳にも入れず、さつさど行つて終はうとするど  
 「あの、宇津木さん、兵馬さん、島田先生は死にましたよ、貴方は  
 それを知つてますか」

この一語は兵馬を驚かさないうけには行きませんでした。

「ナニ島田先生が亡くなられた！」

ズカー／＼と立ち戻つてしまひました。

「ソレ御覽なさい！」

「島田先生が亡くなられたといふのは、そりや眞實か」

「どうですか」

「そりや僞だ、出立の時まで彼の通り壯健でござつた先生が……」

「僞なら僞でようござんす、御信用のない者にお話をしたつて詰りませんから」

「そんな筈は無い、嘘だ僞だ」

兵馬は其れを言ひ消て見たけれども決して心が安んじたわけではありませんでした。まだ老病で死なれる歳ではない、また苟且の病に命を取られるやうな脆い鍛練のお方でもない、況んや刀刃の難によつて命を殞す事のあり得べきお方ではない、若し先生が死なれたと

すれば、病難、劍難の外の人間の手では、どうしても防ぎ切れな天災によつて殺されたと思ふことの外には想像が届かないのでありました。

「それは僞、嘘に定まつてゐる」

「貴方といふ人は思ひの外不人情なお方ですなえ、現在自分のお師匠様が亡くなられたのに、それも知らず折角それを知らして上げやうとするのをお耳にも入れず、それで武士道とやらが立ちますならば御勝手になさいますし……わたしは人柄がこんなで身を持ち崩してしまつたから、眞劍に云つても浮氣に取られるのが口惜しい、わたしたつて時と場合によれば随分これで涙脆いことがありますのよ、あの御徒町の島田虎之助先生とも云はれるお方が人手にかゝつてお果てなさるとは……」

「ナニ、人手にかゝつて……」

「そのお話を聞いた時は、わたしのやうなものでも涙がこぼれましたねえ、あの先生がまあ……」

「島田先生が人手にかゝつて……いよくそれは偽りじや、嘘じや人手にかゝつて亡くなられる、その様な筈がない、餘人ならば知らぬ事、島田先生が人手にかゝつて、そんな事、そんな事のあるべき筈がない、天地が逆さになつたとて」

兵馬の舌が自ら縫れるのでありました。

「それほど、わたしの云ふ事を御信用なさらないのなら、それで宜うございます、もう何も申し上げすまい、成程、島田先生は人手にかゝるお方ではない、今の世に尋常であの先生を手にかけるやうな手利は無いに定まつてゐる、それは貴方の仰有るまでもない事、誰

でも知つて居ますけれど、何も及物はかりが人手ではなし……」

「そんなら如何して先生が」

「毒ですよ、島田虎之助先生は毒を盛られてお亡くなりなさいました」

「毒！」

兵馬の渾身の血が逆流すると見えました。

「それだけ、お話し申し上げたら、もうわたしの役目も済みました

「それではこれでお暇を致しませう」

「ま、待つて、もう暫く」

攻守勢を異にしてしまひ、兵馬はお絹の袖を捉へて放さないのではありません。

「わたしのお呼び立てしたことが、真剣でした事は浮氣でしたこと



か、それがお譯りになれば、わたしはもうお暇を致します』

「よく教へて下された、嘘か真か其のやうな疑ひを申して居られる事でない、御禮を申し上げまする』

兵馬は伏してお絹の前に禮をする、その眼から涙が落ちる。

「いえ、御禮では痛み入ります、あゝこれでわたしの心持が届いて嬉しい』

「どうか御存知ならば、もう少し詳しく其の事をお話し下さらぬか』

「知つてゐるだけは、お話し申しませうとも、けれども、こんな處ではお話しをし悪いから、あれへ参りませう、あの清涯亭といふ宿あそこに申し付けてありますから、静かな處で、ゆつくりお話し申し上げませう、わたしも暇でございいますから』

「いや、それは』

「お思でございいますか』

程なく兵馬の姿は大湊の町の船着きへ現れました。あの場ではお絹を怒らせて袖を振り切つて此處へ來てしまひました。

「兵馬さん』

お松は船の仕事着ではなく小綺麗な身扮をして、船着場の茶屋に待つて居りました。

「今日は何方へお出でになりました』

「二見の方へ』

「藪の中や何かをお通りなされたらしい、此んなに草の實が着いて居りまする』

お松は兵馬の袴の裾に着いた草の實や塵を拂つてやる、

「松林の中を無暗に歩いたものだから、随分息も切れたわい」  
兵馬は腰掛に休んで茶を飲む。

「あ、それからからお松、今日はまた珍らしい人に會つたぞ」

「珍らしい人と仰有るのは」

「お前の親類じや、當て見るが宜い」

「わたしの親類と申しましても」

お松にも親類の人もある、世話になつた人もあるけれど、それ等の記憶を呼び起すと餘り好い心持はしないのでした、

「それはお前に取つては怖い人ではない、どちらかど云へば懐しい人だ、懐しい人だらうけれど、油断は出来ない人だ」  
兵馬はワザと廻りクドク云つて見せると

「まあ、誰でせう、わたしの親類で其んな人、若し本郷の伯母さん

では……」

本郷の伯母さんといふ人は、お松を島原へ賣つた人、不人情で愆が深く、其の癖口前のよい人、

「いや、そんな人ではない、言つて見やうか、それは湯島妻戀坂のあの花のお師匠さんぢや」

「まあ、お師匠さんに」

お松は断えて久しい妻戀坂のお師匠さんの事を兵馬の口から聞いてそゞろに昔の事が思はれて堪りませんでした。此の時、町の方からがや／＼と噪がしい人聲。

「いや、與兵衛さん、御苦勞々々々、もう此處で宜しい」

それは仙公を連れて、船大工の與兵衛に送られた長者町の道庵先生でしたから、兵馬も驚いたがお松の方が一層意外な感じがして、直

に呼びかけやうとしてゐますと、道庵先生はお松の方には氣がつかず與兵衛に向つて

「もう此處で宜しいから歸つて呉れ給へ、うむ、もうごちらも大丈夫、心配することはない、野郎の方は少々跛足になるかも知れないが、身體の處は間違いつこなし、薬は飲まなくても放つて置けば自然に癒る」

「へえ、どうも有難うございます、ほんとにどうも全く先生のお蔭様で」

與兵衛は道庵の前へ連りに頭を下げる。

「それから、あの眼の方なあ、あの眼は野郎から見ると難物だからな、併しまあ彼して置けば十日や廿日は持つ、その中江戸へ出て来るといふから来たなら、拙者が處へよこしなさい」

「へえ、何から何まで有難うございます」

與兵衛は繰返してお禮を言ひます。

こゝで道庵先生が、野郎の方は少々跛足になると云つたのは勿論米友の事で、眼の方は難物だといふたのは多分机龍之助の事でありませう。

さきの晩、與兵衛が傳馬で若山丸へ頼みに行つたのはお玉一人であつて、龍之助は、やはり與兵衛の家に隠されて居るものと見なければなりません。

道庵も江戸へ歸るものと見えて、すつかり旅装束になつてゐましたその時にお松が

「先生、道庵先生」

「おや／＼」

「いつぞや、先生のお世話になりました江戸の本郷の……」

「あゝ、さうであつたか、それはくゞ矢張りお前さんもお伊勢参りかな」

「いゝえ……」

「道庵先生」

今度は兵馬が呼びかける。

あつちからも道庵、こつちからも道庵で、先生面食つてしまひ

「恐ろしく道庵の賣れの宜い日だ、お前さんは誰様でしたかね」

「浪士に追はれて、先生のお宅へ走り込んだことがありました、その日は察いお世話になりました」

「そんな事も有つたけかな、お前さんも何かね、伊勢参りかね」

「いゝえ違ひます、拙者は別に用向があつて上方から、して……」

これから何方へ」

「拙老は伊勢参りの歸りぢや、この奥兵衛さんといふ人の家にお世話になつてな、折角の好意だから、舟で桑名まで送つて貰つて、それから宮へ行かうといふのだ、お前さんも江戸へお歸りなら、一緒に舟で行かうではないか」

「私共は、あの大船に乗るやうに定まつて居りますから」

「左様でござるか、それでは舟の出るまでドレーぶく」

道庵先生の一行は奥兵衛の仕立て、呉れた舟で桑名から宮へ向ふ。兵馬とお松とお玉とを乗せた若山丸は十六反の帆を揚げて大湊の港を船出する。

米友の身體も道庵先生の力によつて舊に復するし、机龍之助も亦計

らず道庵先生の力によつて幾分か視力を回復したらしい、七兵衛はムク犬と一緒に何處へか駈けて行つてしまつた、やくざ旗本を先へ歸して、一人残つたお絹も、さう何時までも遊んで居られるものではないから歸りの仕度をする、これ等の連中の心々はそれと違ふけれども其の目ざして行く處は皆んな東の空でありました。

# 大菩薩峠

(間の山の巻了)



縮刷大菩薩峠  
第一冊  
(第一二三四五六卷)

合本  
著者  
發行者  
印刷者  
印刷所

中里介山  
神田豊穂  
東京日本橋區數寄屋町一番地  
小島為吉  
東京市小石川區初音町八番地  
小島印刷所  
東京市小石川區初音町八番地

大正十二年二月五日 改版縮刷  
大正十二年二月十五日 發行  
大正十四年二月十五日 震災後第九版

定價金參圓

發行所

春樹社

東京市日本橋區數寄屋町一番地  
振替東京二四八六一番  
電話

中里介山著

大菩薩峠 縮刷

内容	第一集	1 甲源一刀流の巻	2 鈴鹿山の巻
		3 壬生の島原の巻	4 三輪神杉の巻
		5 龍神の巻	6 間の山の巻
		7 東海道の巻	8 白根山の巻
	第二集	9 女子と小人の巻	10 市中騒動の巻
		11 駒井能登守の巻	12 伯耆安綱の巻
	第三集	13 如法闇夜の巻	14 お銀様の巻
		15 慢心和尚の巻	16 道庵と鱈八の巻
	第四集	17 黒業白業の巻	18 安房の國の巻
		19 小名路の巻	20 禹門三級の巻

定價各集各料送 圓參金集各料送 錢六拾金集各料送

中里介山著

聖母の畫像

定價壹圓 送料拾錢

同上

淨瑠璃坂の仇討

定價壹圓九拾錢 送料拾四錢

松崎實著

小説

扉

(地獄篇)

定價貳圓五拾錢 送料拾四錢

島田清次郎著

我れ世に敗れたり

定價貳圓 送料拾四錢

トリスの代表的名著

宮島新三郎譯	人生論	定價 八拾錢 送料 八錢
木村毅譯	藝術とは何ぞや	定價 壹圓 送料 拾錢
細田源吉譯	私の懺悔	定價 四拾五錢 送料 六錢
加藤一夫譯	宗教とは何ぞや	定價 七拾錢 送料 八錢
同上	我が宗教	定價 壹圓貳拾錢 送料 拾錢
同上	我等何を爲すべき乎	定價 壹圓八拾錢 送料 拾四錢

終

